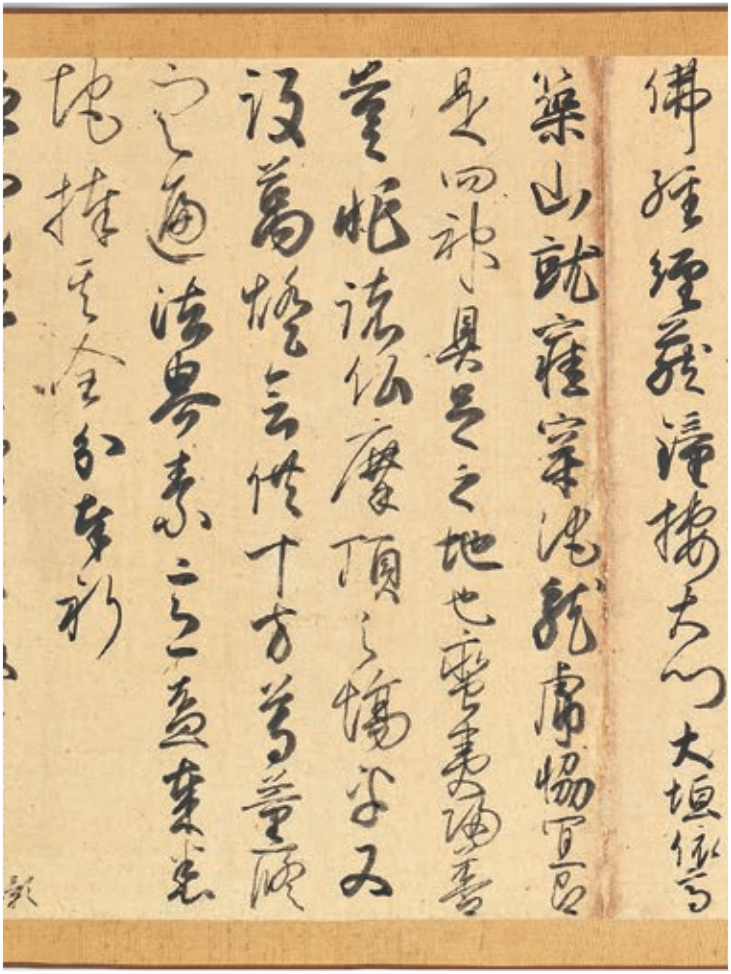
関山

かんざん

第31号



寺報　**中尊寺**

目次

寺報　グラビア

「諸佛摩頂之場」
―中尊寺落慶九百年に誓う―　奥山　元照　5

諸佛摩頂之場　貫首　奥山　元照　書　8

「中尊寺落慶九百年」にあたって　菅原　光聴　9

中尊寺建立への道　八重樫忠郎　11

〈特別対談〉地の利　人の和　清水克行・貫首　15

芭蕉祭特別講演「戦争と俳人」　白濱　一羊　33

比叡山宗教サミット
「世界平和祈りの集い」　破石　晋照　39

令和七年度讃衡蔵展示文化財調査中間報告　菅野　澄円　41

楽しかった山田前貫首と過ごした
平泉世界遺産応援団の日々　平山　健一　45

大長寿院前住職
菅原光中さんを偲んで　五十嵐正一　59

関山句嚢・歌籠　62

関山植物誌〈16〉　破石　晋照　70

福聚教会・中尊寺支部便り　菅原　園子　71

新刊紹介　73

思い出と歩み　達谷窟南都　75

平泉から浄法寺へ　菅野　宏紹　78

令和七年度 比叡山延暦寺・
伊勢神宮　団体参拝報告　清水　秀法　80

本坊表門解体修理
中間報告と勧募御礼　菅野　靖純　83

正月に想うこと「日々是好日」　佐々木圓了　87

天台宗ニューヨーク別院出張報告　佐々木祐輔　89

陸奥教区宗務所報　92

本坊表門解体修理浄財御奉納者　御芳名　95

御奉納者　御芳名　103

浄財御奉納者　御芳名　103

不動尊篤信御奉納者　御芳名　105

執務日誌抄　107

〈表紙〉中尊寺建立供養願文（輔方本）
龍虎協宜　即是四神具足之地也
蛮夷帰善　豈非諸仏摩頂之場乎

秘佛御開帳　一字金輪佛 頂 尊坐像　　予告ポスター

元旦 磐井清水若水送り

護摩祈祷 智慧の火で煩悩の薪を焚く

大節分会

中尊寺秘佛 一字金輪佛頂尊 坐像

令和八年(二〇二六)、中尊寺落慶九〇〇年並びに「平泉」世界文化遺産登録十五周年を迎えます。
先のご開帳から十年、
中尊寺では秘佛「一字金輪佛頂尊」御開帳を厳修し、
すべての生命の幸福を祈願した
藤原清衡公の志を発信してまいります。

一字の真言「ボロン」で表される最勝・最尊の仏さまで、奥州藤原氏三代秀衡公の念持仏と伝えられます。
前半部のみの薄いお姿で背面は光背に密着し、頭髪や肉身には彩色が施されて俗に「人肌の大日如来」として篤く信仰されています。

平安時代(十二世紀)カツラ材の寄木造、像高七十六cm、重要文化財

「諸佛摩頂之場」

― 中尊寺落慶九百年に誓う ―

中尊寺 貫首　奥山元照

本年、令和八年（二〇二六）は中尊寺の堂塔伽藍が落慶して九百年、そして「平泉」世界文化遺産登録十五周年を迎える、大きな節目の年となります。

當山は、嘉祥三年（八五〇）慈覚大師円仁大和尚によって開山されました。大師によって「法華一乗」の教え、すなわち「一切衆生悉有佛性」「草木国土悉皆成佛」の大乗仏教の教えが伝えられたのでした。

その後、奥州藤原氏初代清衡公により、大規模な堂塔伽藍の造営が長年にわたって進められ、ついに天治三年（一一二六）中尊寺が落慶したのです。

清衡公の半生を振り返りますと、「前九年・後三年の役」の戦いにより父や妻子を失い、兄弟とも悲惨な争いを余儀なくされました。この耐え難い体験により、清衡公は争いの無い平和な世の実現を願い、戦いで失われた全ての尊い命を平等に供養し、浄土に導かなければならないという決意を抱いたのです。そのために中尊寺は、みちのく全土を仏土とするために輝きを発信し、祈りの世界を体感するための光源にならなければならなかったのだと思います。

近郷 舞川の鹿子踊 奉演

地元の園児による謡　声高らかに

一山の僧による能「枕慈童」

そしてみちのく全土の平和実現への、深く切実な願いを込めた「中尊寺建立供養願文」が、中尊寺落慶の当日奉読されたのでした。

その一節には、

「是を以て　貢職の羨余を調へ　財幣の涓露を抛ち　吉土を占めて堂塔を建て　真金を冶きて　佛経を顕わす
経蔵　鐘楼　大門　大垣　高きに依って　山を築き　窪みに就いて　池を穿つ　龍虎宜しきに協ひ　即ち是れ
四神具足の地なり　蛮夷　善に帰し　豈　諸佛摩頂の場に非ざらんや　又　万燈会を設け　十方尊に供す
薫習　定めて法界に遍く　素意　蓋ぞ悉地を成ぜざらんや」と。

つまり、「そこで、租税として貢いだ後の私財をもって、良き土地に堂塔を建て、金を溶いて佛経経典を書写いたしました。経蔵、鐘楼、大門、大垣などを建立し、高い所には築山を施し窪地には池を掘りました。このようにしてこの平泉の地は、「龍虎は宜しきにかなう」という「四神具足の地」となりました。蝦夷の人々も仏の教えに帰依して、まさにこの地は、多くの仏様に頭を撫でていただくことができる「諸佛摩頂の場」浄仏国土となるのです。そして万燈会に捧げられた香華灯明が十方の諸仏に供養され、漂う香の薫りは、すべての世界に行き渡り、浄仏国土の建設が悉く成就されることを願います。」と述べられています。

ここに示された意図は、「鎮護国家の大伽藍」が当時のみちのくの人々自らの祈りから生まれたことが述べられ、そしてさらにこの寺は「諸佛摩頂の場」であるとして、みちのくの地が浄仏国土に他ならないことを宣言しています。この地を訪れれば、ひとりも漏れることなく仏さまに頭を撫でて頂くことが出来る。諸仏の功徳を直に受け取ることが出来る特別な場所であるという意味です。

この世の平和を何よりも切望した初代奥州藤原清衡公の悲願がこの建立供養願文には込められています。

自らの主張だけを絶対化する「自分ファースト」の考えが広がる現代の自己中心主義の流れの中で、あらためて清衡公が建立供養願文でお示しになられた精神の高さと無限の広さと深さ、そしてその温かさが発する平和への誇り高き光芒をあらためて思い起こさずにはいられません。

貫首　揮毫

「中尊寺落慶九百年」にあたって

菅原光聴

藤原清衡公は天治三年（大治元・一一二六）、中尊寺堂塔造営の掉尾を飾る善業として境内南谷に一区を定め「鎮護国家大伽藍」を建立し「中尊寺建立供養願文」を捧げられました。みちのくの地に散った過去の冤霊を平等に供養し、現世に諸仏摩頂の仏土を築き、未来世のあらゆる世界、あらゆる生命に限りない利益が及ぶことを切願されたのです。

本年・令和八年（二〇二六）はそれから九百年にあたります。今も世界各地で国家・地域間の戦争や対立が後を絶ちません。私どもは供養願文の精神を広く発信せんとの矜恃をもって落慶九百年慶讃の諸事業に取り組んでまいる所存です。是非とも多くの皆様にご賛助いただけましたら幸甚です。

まず慶讃事業の幕開けとして、鎮護国家大伽藍落慶の日にあたる三月二十四日、中尊寺奥山元照貫首の揮毫により供養願文の句「諸佛摩頂之場」を扁額に刻み、本堂に掲揚して除幕式典を行います。出仕の僧侶、ご参列の皆様、共に供養願文の要文を唱和し清衡公による願文の真髄を顕彰します。

同日から五月十日まで宝物館・讃衡蔵にて重要文化財『中尊寺建立供養願文』顕家本・輔方本の原資料を特別展示いたします。普段はレプリカ展示となっており、実物が展観される貴重な機会となります。

六月二十七日には有縁の皆様をお招きし「中尊寺落慶九百年慶讃法要・記念式典」を執り行い、落慶九百年を祝賀いたしたいと存じます。

本事業の主要行事といたしまして七月十七日より十一月十日の会期にて「秘仏・一字金輪仏頂尊」の御開帳を厳修し、清衡公が供養願文で述べられた抜苦与楽・普皆平等の祈りを讃揚いたします。

九月十九日より二十三日まで、三陸地方をはじめとする「みちのく郷土芸能奉演」を行い、東日本大震災

本堂扁額「諸佛摩頂之場」
（中尊寺貫首　奥山元照　揮毫）

より十五年を迎える東北の慰霊と復興を祈念いたします。

さらに本年は金銀字一切経五千三百巻の完成より九百年にあたる年でもあります。これを慶讃して十月十九日から十一月十五日まで讃衡蔵企画展「経蔵と金銀字経」を開催いたします。

十月二十四日から十一月八日まで恒例の参道照明「紅葉銀河」によって鮮やかに境内を照らし、供養願文に記された「万燈会」への讃仰とさせていただきます。

また令和八年は骨寺村（現・一関市本寺地区）が中尊寺経蔵別当職の荘園となって九百年、平泉の文化遺産が世界遺産に登録されて十五周年という節目の年でもあります。

是非当地を訪れ、「平泉の文化遺産」に込められた平和・平等への祈りを感じて頂けましたら幸いです。

（執事長）

中尊寺建立への道

八重樫　忠　郎

岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターでは、昨年、「清衡と後三年合戦絵巻」という企画展を開催した。絵巻と『後三年記』という詞書からなる重要文化財に指定されている『後三年合戦絵詞』は、合戦から三百年近く経った貞和三年（一三四七）に制作されたものである。この絵詞のことを貞和本という。そして現在に伝わる数多くの後三年合戦絵巻の写本は、すべてこの貞和本を写したものとされている。

絵詞の作者について

さてこの貞和本は、室町時代に作成されたものなので、史料価値は低いとされてきた。ところが近年の研究により、まず『後三年記』に記されている用語の使い方に、一二世紀前半の特徴がよく表れていることが判明する。次には、『後三年記』から想像して絵巻が書かれたとされてきたが、詞書にない人物等が描かれていることから、もとになった絵巻が存在したと考えられるようになった。これが『後三年絵』である。この絵巻は、源義経を翻弄した後白河法皇も見ている。

さらには作者についてであるが、かつては勝者である源義家や義光兄弟の関係者が作ったといわれてきたが、彼らが戦勝の褒美をもらえず、「むなしく京都へ帰った」というところで終わっている。つまり源氏がハッピーエンドになっていないのである。そして何よりも詞書は、陸奥国（岩手県など）を当国、出羽国（秋田県など）を隣国と数か所で表現している。つまり作者は陸奥国の住人ということになる。

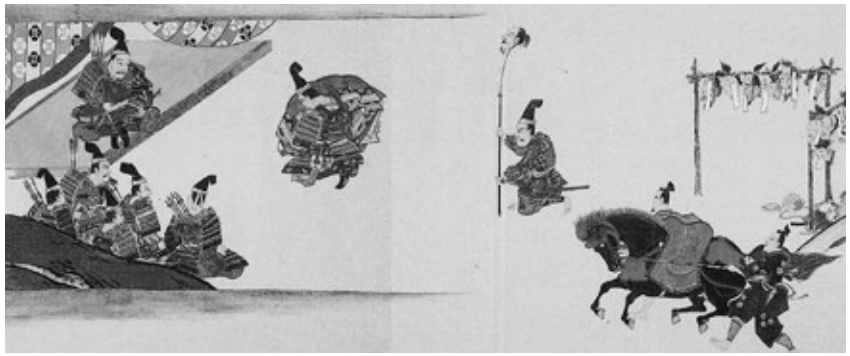
以上の最新研究の成果によって、『後三年記』は平泉藤原氏初代清衡によって、平泉で書かれたことが明らかとなった。『後三年絵』に関しても、清衡自身が描かせたのかについては、はっきりしない部分もあるが、清衡が関わって成立したということは、一致している。つまり後三年合戦絵巻には、清衡の意思が反映

されている事になる。

後三年合戦のあらまし

前九年合戦が終わると七歳の清衡は、母が清原家の当主に再嫁したため、連れ子として清原を名乗ることとなった。清原家にはすでに嫡男の真衡（さねひら）がおり、次男が清衡、その後に生まれた家衡（清衡の異父同母弟）が三男となり、複雑な血筋の三兄弟が揃う。後三年合戦の発端は、真衡の統治に不満を持った一族のものが、清衡と家衡をけしかけ、真衡の留守宅を襲わせたことであった。真衡は、陸奥守源義家を頼り、二人の弟を滅ぼそうとするが、合戦の最中に頓死してしまう。そこで清衡と家衡は義家に謝り許されるのであった。

すると今度は、家衡が清衡を襲うという事件が起こる。これによって妻子や部下たちをすべて失うが、何とか一人生き残った清衡は、やはり義家を頼みにすることとなる。家衡は沼柵（ぬまのさく）（秋田県横手市雄物川）に籠り、義家と清衡連合軍を退けた。これを見た叔父の清原武衡（たけひら）が家衡軍に加わり、いよいよ合戦は佳境の金沢（かねざわ）柵（秋田県横手市金沢）の攻防戦へと移っていく。



薙刀の先に突き刺された家衡の首級

家衡と武衡が籠城する金沢柵を連合軍は包囲し、日本史上初の兵糧攻（ひょうろうぜめ）めを行う。やがて柵内の食糧も乏しくなるが、冬になったことで取り囲む側も厳しくなった。我慢比べの様相を呈してきたため、義家は力攻めを決断し、薄氷の勝利を得る。生け捕った武衡は斬首。柵を脱出した家衡は射殺され、その首は薙刀（なぎなた）の先に突き刺された。義家を罵倒（ばとう）した千任（ちとう）も捕らえられ、舌を抜かれて木に吊るされる。そしてその足元には当主である武衡の首が置かれた。主を踏むまいと最後の力を振り絞るが、やがて息絶え千任は踏んでしまう。

義家は、恩賞を得るために朝廷に報告する。しかし武士の台頭を恐れた貴族たちは、義家による私戦という判断を下す。これによって義家たちは、首を道端に捨て、肩を落として京へ帰ることになるのである。

中尊寺建立への道

義家の失脚によって、唯一の勝者となった清衡は、合戦が終わったのち、戦場となった陸奥出羽両国を見

千任惨殺の場面

て回ったことだろう。自身と同じ父を亡くした戦争孤児、またわが子を失い呆然とする両親、荒れ果てた田畑、焼かれた山々。そこには、生き残った人々の行き場のない怨念（おんねん）が、渦巻いていた。

そして戦禍はさらに続く。作物はすぐには実らないことから、食糧難は数年に及び、薪が少なくなったことによる凍死者も出る。とにかく清衡は、戦後復興を進め、融和に努める他、なすすべはなかった。

清衡はすべてをリセットするため、平泉に移り住むことを決意。最初に政治の拠点である平泉館（平泉町柳之御所遺跡）を整備し、次に後三年合戦の鎮魂を目的とした中尊寺の造営に取りかかる。たぶんこのころから清衡は、半生を顧みるゆとりが生まれたのだろう。妻子眷属を弟に殺されたことによって修羅となってしまい、義家が両国支配に野心を持っていたことを知りながら彼を頼み、戦火を大きくし、たくさんの人々を苦しめ、芳醇な大地を灰にしてしまった。

清衡は、この戦争責任から、一刻も早く、少しでも遠くに離れたかったに違いない。そんな想いが、『後三年記』を記させたのではないだろうか。副将格の清衡は、まったく存在感がないし、また『後三年合戦絵巻』では、わずかに二カ所に登場するのみである。

凄惨な場面が多い『後三年合戦絵巻』。今回じっくりと観察することができたため分かったが、それはおそらく清衡自身が犯してしまった罪の深さを表しているのだと思う。清衡の異様ともいえる仏教への傾倒には、このような背景があったのである。しかし絵巻にわずかに現れる彼の表情は、その苦しみから解放されたようにも見える。

このあたりを描く頃には、すでに中尊寺の落慶が決まっていたのかもしれない。敵や味方の区別なく、生きとし生けるものすべての平等と平和という『中尊寺建立供養願文』は、後三年合戦の悲痛な体験から生まれたものだったのである。今年、三月二十四日、中尊寺は九百年を迎える。

岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター　やえがし　ただお

中尊寺建立九百年記念特別対談

「地の利　人の和」

奥山元照
清水克行

金色堂九百年記念展を振り返る

貫首　今日は、明治大学商学部教授の清水克行先生とお話しが出来るということで、楽しみにして参りました。

清水　こちらこそ、よろしくお願いします。

貫首　先生とは、令和六年の金色堂建立九百年のおりに、ＮＨＫの８Ｋ放送での特番「中尊寺金色堂　デジタルで解き明かす９００年の謎」で進行役をお務め頂いたことが縁となっております。

清水　実はＮＨＫからお声がけいただいた時、一度お断りしておりまして。私の研究は室町時代が中心で、平泉について深く研究したことがなかったものですから。ただディレクターさんからは、金色堂の謎について正解が一つとは言えない議論になるかもしれないので、中立的に客観的に話せる研究者が進行役に居て欲しいと口説かれまして、お引き受けした次第です。結果としては非常に勉強になりましたし、金色堂・平泉・奥州藤原氏について興味を新たにしているところです。

貫首　番組の率直なご感想をお聞かせください。

清水　ＮＨＫが４Ｋ・８Ｋという高精細な技術を駆使する番組構成として、金色堂をデジタル上で再現するというのは、非常によくマッチしていたと思います。もう放送も終えていますのでお話し出来ますが、実はスタジオに設置された大きなスクリーンに写された金色堂は赤みを帯びていまして、実物とは少し色合いが違うんです。だから最初はアレっ？　と思ったのですが、あれは８Ｋのスクリーンに写したものを、スタジオの８Ｋのカメラで撮影して、さらに電波に乗せて、それぞれのご家庭のテレビで映し

対談の様子

出したときに初めて、狙った金色堂の色になるように調整されていたのだそうです。

貫首　私も放送をテレビで見た側の人間ですが、そんなことは気づきませんでしたね。

清水　同じスクリーンが東京国立博物館の展示室に設置されていましたが、そちらを見たときは本当に綺麗でしたし、色に違和感もありませんでした。なるほど、そういうものか、と勉強になりました。

貫首　東博の展覧会にも足をお運び頂いたのですね。

清水　もちろんです。文化財を今後も永く保存・管理していくという意味では、最新の技術で現状を記録しておくというのは意義深いですね。あってはならないことですが、時間の経過とともに劣化したり、不慮の災害などによる毀損の心配もありますので。その時の修復、復元には、こうした情報は重要な手がかりになりますよね。ただ、お寺さんとしてはどのような思いだったのでしょう？　仏さまを360度全方位から撮影されるのは、抵抗もおありだったのではないですか。

貫首　確かに実際の作業の現場を見ますと、抵抗がなかったといえば嘘になりますが、先生がおっしゃられたように、令和の金色堂の現状を克明に記録出来たという意義は大きかったと考えています。

清水　東博の展示でも、私はてっきり須弥壇を模した展示台の上にまとめて仏さまがお祀りされるのかと思っていたら、それぞれの仏さまが独立して全方向から見られる筒状の展示ケースに入れられて、本当に隅々まで拝見させて頂きました。

貫首　我々が須弥壇の中に入っていくような配置でしたからね。あれはあれで寺の中でも様々な意見があったわけですし、私自身も危惧というか心配もしていたのですが、展示をご覧になっている方々を見ていると、皆さん仏像に対する信仰や畏敬の念をしっかりと持って下さっていたので安心しました。

清水　私も含めて、観覧された方は貴重な体験だったと思いますよ。

歴史家

貫首　先生は明治大学で教鞭を執られていますね。

清水　ええ。でも、出身は立教大学の文学部なんです。

貫首　実は私の身内にも立教大学で史学を学んだ者がおりまして、先生と対談するので卒論は何を書いたのか聞いてみたところ、川越の喜多院の出開帳をテーマにさせていただいたようです。喜多院の江戸中期から明治までの公式の日記である『喜多院日鑑』、墨書の古文書ですが、それを当時御住職だった塩入亮善先生と大正大学史学の宇高良哲先生が協同で活字本として編集刊行されたのが昭和の終わり頃でしたね。また一学生の卒論にとっては、そのような基礎資料は非常に有り難かったはずです。

清水　地元や縁のある方が、その土地や関連する事柄を研究されるというのは良いことですね。リアルなイメージを培うためにも、地の利、人の和は大切だと思います。

貫首　先生が歴史家を志したのは、何かきっかけがありましたらお話しください。

清水　私の場合、そんなに大層なものじゃありません。小学校三年生の時にＴＢＳで正月に三夜連続大型ドラマ『関ヶ原』という番組があったんです。森繁久彌さんが徳川家康で、加藤剛さんが石田三成、原作が司馬遼太郎さんなんですよね。かなり骨太でしっかりしたドラマで、それを、うちの父と一緒に見たのが一番最初の「歴史」との出会いです。子供なので複雑な話なんてわかるはずないんですけど、なにかすごく面白かったという印象が残ってます。主人公は三成で、豊臣家を守る正義の味方。ところが、老獪な家康がいろいろ罠を仕掛けて、どんどん旗色が悪くなっていって。途中で父に「この先どうなるんだ？」って聞いたんです。そしたら、父は「主人公の三成が最後は負けるんだ」とサラリというわけですよ。で、それに衝撃を受けまして（笑）。小学生の見るテレビ番組なんて、主人公が勝つのが当たり前ですから、「イイモノが負けるんだ!?」と。さらに驚いたのは、これは四百年前に本当にあった話だと。それがきっかけで学校の図書館で子供向けの歴史の本を色々調べて読み出して。それでまた驚いたのは、本によっては家康がイイモノのように書いているものもある。これはいったい何なんだろう、と思って、いろんな本を読み出した、というのが「歴史」への関心の最初ですね。見る立場によって主人公が変わったり、評価も変わる、というのが、歴史の面白さなんだ、ということに子供なりに気づいて、深みにはまっていったんだと思います。

貫首　先生の授業やゼミでは、どんな学生さんが学んでいますか。十年くらい前に歴女なんて言ってましたし、女性も多いのでしょうね。

清水　歴女なんて騒がれたのは、二〇〇〇年代の終わり頃でしょうか。それまでは歴史に興味を持ったり学んだりするのは中年男性、というステレオタイプがあったからかもしれませんね。でも、私のゼミの学生でも女性は多くて、現在では歴女なんて言うのはもう失礼なことかもしれません。時代ですね。一昔前の大学は春先は教室が学生で一杯でも、講義を重ねるとだんだん減っていったものですが、今は出

席率も高くて熱心に学ぶ学生が多くなりました。大学も教室の座席を確保するのに苦労するほどです。

室町時代

貫首　先生はやはり室町時代というか中世を中心に教えてらっしゃるのでしょうか。

清水　そうですね。日本史では、一般的に平安末期から戦国時代まで（十二～十六世紀）を「中世」と呼ぶのですが、そのうち私の専門は室町時代（十五世紀前後）になります。室町時代になると民衆が力をつけてきて、貴族や武士などの支配層に対して自己主張して突き上げを行なうようになり、より社会が混沌としてくるのが大きな特徴です。ダイナミックな変化の時代というイメージを持っています。従来のとらえ方だと、戦国時代が歴史のターニングポイントとされてきたのですが、最近の傾向としてはもうちょっと早い室町時代ぐらいに緩やかな変化が起きて、少しずつ社会が変わっていったのではないかと考えられています。たとえば、家制度や村や町のような地域共同体の基礎が出来上がるのも、ちょうど室町時代ぐらいなんです。それにともなって庶民の信仰のかたちも変わっていって、江戸時代の檀家制度の基礎が出来上がっていくように思います。一方で現代は、まさにそうした家制度や地域共同体が良くも悪くも崩れつつある時代なので、そのルーツを探るという意味でも、室町時代研究の意義は大きいと思っています。

貫首　家制度とか寺檀制度っていうと江戸時代、江戸幕府が作ってという認識でした。それ以前から庶民の中には、そういった形があってのことなのでしょうか。

清水　寺檀制度に関しては、よく江戸幕府による宗教統制としての側面が強調されるのですけれど、むしろ民衆の中から生まれたものを幕府が吸い上げて制度化していった、という評価のほうが正しいと思います。冥界の存在を信じていた室町の人々にとって、死後に自分の魂が成仏できずに行き場を失い彷徨（さまよ）うというのは耐えがたいことなので、しかるべきお寺

にちゃんと祀られたいという思いは非常に強かったのだと思います。ところが、それは個人の財力ではとても出来ない。そこで、かわりにみんなでお金を出し合って、村の中にお寺を立てようという動きが起こる。それが寺檀制度の元となったと、近年では江戸時代研究でも考えられるようになっています。

貫首　金色堂にも、室町時代に亡くなった親族の遺骨の一部を小さな卒塔婆に入れて納めたり、それこそ

笹塔婆・木製五輪小塔

経済的余裕の無い人は小さな笹塔婆に親の名前を書いたりして、天井裏に納める風習があったようです。昭和の大修理でそういったものが見つかっていまして。

清水　まさしくそれが民衆の願いなんでしょうね。極楽往生を求める気持ちに身分は関係ないということでしょうか。興味深いですね。

中尊寺落慶九百年

貫首　今日先生にお伺いしたかったメインのテーマなのですが、令和八年三月二十四日に中尊寺の落慶供養から九百年を迎えます。

清水　九百年にわたり伽藍が護持されてきたということは、本当に素晴らしいことだと思います。私が中世史を研究していて面白いなと思うのは、中世は今のように日本が均質な社会になる以前の時代なので、そのぶん分権的な状態で地方が自立していた、まさに「地方の時代」なんですね。そこにはいろいろな可能性が満ちていて。例えば、源頼朝が負けて

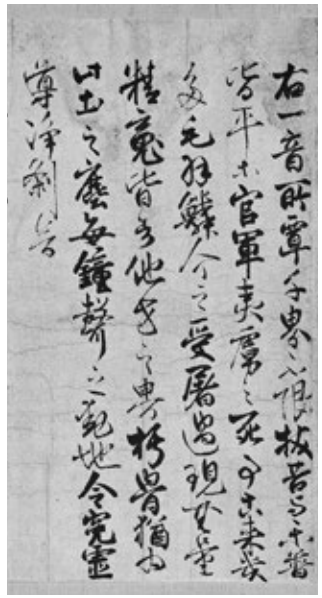
藤原秀衡が勝ってたら、どんな社会が生まれたか、鎌倉幕府がなかったら、その後の社会はどうなったか、というような様々な可能性を感じさせる時代なのです。日本が果たし得なかったもう一つの可能性を感じさせるのが、中世史の魅力だと思います。特に鎌倉幕府のイメージは近年の研究では大きく変わってきまして、彼らは異常なまでに好戦的な権力体で、彼らの支配だけが唯一絶対の道では無かったことが指摘されています。「武士道」についても我が国ではプラスの価値で語られる伝統が長かったわけですけど、やはり彼ら武士は人を殺すのを職業とする人たちであって、そうした人たちが何かというと武力で物事を解決する伝統を作ってしまった日本の歴史のマイナス面は否定しがたいと思います。それに対して平泉の藤原氏は、鎌倉幕府とは異なり、仏教の力や文化の力で人々をまとめるという姿勢をかなり強く打ち出してて、面白い可能性に満ちた存在だったと思います。

貫首　当時、みちのく、道の奥の地であったわけですけれども、あえて清衡公が奥州藤原氏がそこに寺院を中心とした一つの国を作って、そしてただ単に武力で固めた国ということではなくて、庶民まで幸せに暮らせるようにという願いを込めた中尊寺建立だと思っています。その落慶式に読まれた供養願文について、先生なりの捉え方がございますか。

清水　あの供養願文に見える「怨親平等」の思想、敵と味方、人間とその他の生物を問わず平等に供養するという仏教思想は、特筆すべき点だと思います。まさに古代の終わりに、そうした思想がこの地で受容されたというのが、貴重であり興味深いことです。おそらく、その背景には前九年・後三年合戦で流された多くの血があったのだと思います。あの二つの合戦は単なる地域内紛争ではなく、当時、東北地方がフロンティア（開発地）としての価値が高まったことで、その富をめぐって中央権力が介入して引き起こされた内戦です。その意味では、当時の列島社会の矛盾があの内戦に集約されていたわけで、そうしたなかで非業に死んでいったあらゆる生き物を平

等に供養するという、本来の仏教的な思想が見出されていったのではないでしょうか。

建立供養願文



中尊寺建立供養願文（顕家本）

貫首　中尊寺の建立では、二十年以上をかけて大伽藍・諸堂宇を整えて、奥州の人たちにも朝廷にもアピールしていくわけです。清衡公が七十一歳の時にようやく仏教都市平泉の始まりである中尊寺落慶を迎えた。亡くなる二年前のことですから、まさに戦乱後の半生をかけたわけです。

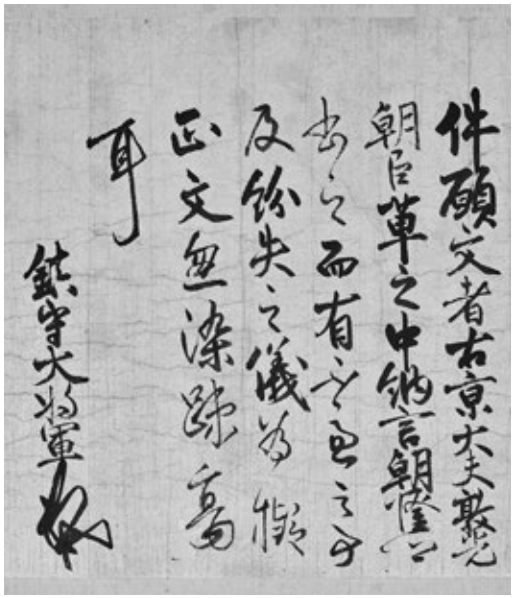
清水　人生の総決算みたいなところがありますよね。

貫首　寺院を建立する際に願文を作って落慶式で読み上げるというのは特別な事だったと聞いています。

清水　供養願文の作成自体は、京都や奈良などでもよく行われるところです。この願文の原文を起草したのも、都にいた藤原敦光ですが、彼は同時代に漢文の才能が高く評価されている文人です。彼らにとって供養願文は腕の見せ所で、どうやって格調高く格好いい文章にするかというところに勝負を賭けるわけですね。

貫首　残念ながら実際に落慶供養の場で読まれた原本は残ってないわけですが――。

清水　ただ、幸いに写しが二通残っていて、そのうち一つが北畠顕家の書であるというのが、興味を惹かれますね。私は室町時代が専門ですので、どうしてもそちらに関心が行ってしまいますが。後醍醐天皇の建武の新政が始まると、顕家は十六歳、今で言えば高校生ぐらいの若さで奥州に派遣され、一三三六年、鎮守府大将軍となった十九歳のときに、この願文を中尊寺で書写しています。そこで、いま残されている輔方本と顕家本という二つの写本の字を比べますと、いずれも力強い字体で、鎌倉末期に書写された輔方本の字体をかなり意識して顕家が写そうとしていることがうかがえます。とくに前半かっちり書いていて、後半割と崩れてくる感じなんかもそっくりです。そもそも供養願文には原本は無かったのではないかという説もあるようですが、顕家の律儀な書写姿勢を見ると、当時から少なくとも「輔方本は原本の正確な書写である」という認識があって、書写する以上、文面だけでなく字体までも極力忠実に写し取らなければ意味がない、と顕家は考えていたのではないでしょうか。



中尊寺建立供養願文（顕家本奥書）

［顕家本奥書］
件の願文は、右京大夫敦光朝臣これを草し、中納言朝隆卿これを書す。而るに不慮の事有りて、紛失の儀に及ぶ。正文に擬せんがために忽に疎毫を染むるのみ。
鎮守大将軍（花押）
（北畠顕家）

北畠顕家

清水　北畠顕家は南北朝の内乱で奥州の軍を引き連れて二度にわたり都に攻め上り、足利尊氏軍と戦うわけなのですけど、残念ながら二度目の上洛戦のおりに二十一歳の若さで戦死してしまいます。その戦死する一週間前に「北畠顕家奏状」と言われる有名な

本尊北畠顕家（福島県 霊山神社）

文章を遺しています。全部で七ヶ条にわたるものですが、そのなかで後醍醐天皇に対して遠慮会釈なくその政治運営を批判しているんですよ。後醍醐という人は、やっぱりワンマンなんですよね。それで人心が離れていってしまって、足利尊氏の離反を生み出してしまったわけです。そこで顕家は天皇に対しても悪いことは悪いと直言するのです。例えば、大した功績のない有象無象を取り立てたり、天皇自身が無駄に贅沢三昧をするから、政治が混乱しているんだと。そして、この諫言（かんげん）が聞き入れられないのだったら、私はもう全てを投げ捨てて、山の中で暮らします、とまで言っています。よほど腹に据えかねていたのでしょう。ですから、北畠顕家という人は決して無条件に後醍醐天皇に心酔していたわけではなく、一方で後醍醐政権というものを非常に冷静かつ批判的な目で見ていた人物なんです。彼自身は公家の出身ですし、年齢も若いのに、なぜそんな客観的な視座をもてたのかというと、奏状の第一条で地方分権みたいなことを言っているんですよね。つまり、中央からすべての司令を出すということが、そもそもの間違いで、ちゃんとした責任者に陸奥でも九州でも委任しておけば、もっと世の中は収まるはずだと。

貫首　自分が鎮守府将軍として陸奥に赴いたことが、発想のもとになったということですね。

清水　そうだと思います。さらには第二条で諸国の年貢を三年間は免除するべきだとか。そうでもしないと、とても民の心は落ち着かないとも述べています。

これは、すべて平泉で学んだことなんじゃないかと思うんですね。どうしても京都にいると身分的にも同質な人間としか接しないので、こういう考えは生まれないと思うのです。顕家が当時の公家としてはかなり特殊な思想を育めたのも、平泉での滞在経験が大きいのではないかと思いますね。

貫首　顕家さんのような立場で、天皇にこういった奏状を出すというのは、一般的なことなんですか。それとも珍しい。

清水　臣下が天皇に対して諫言をするという伝統は、日本でも無くはありません。ただ、二十一歳のそれほどでもない公家が、こういうことをするのは結構生意気だと思いますね。

貫首　なるほど。

清水　顕家の父親は、北畠親房という『神皇正統記』を著した人物なので、かなりのインテリの家系であることは間違いありません。ですから、これだけのことが言えてしまうところがあるんでしょうけど。ただ、言っている内容は父の親房よりもかなりラディカル（過激）ですね。面白い人物だと思います。

貫首　やっぱりそういった平泉での体験があったからこそという感じはしますね。

清水　間違いなくそうだと思いますね。また、教養があるので、それを文飾された非常に格好いい文章で書いてるんです。言ってることは至極まっとうなことですし、たぶん後醍醐天皇も耳が痛かったと思います。

貫首　で、この奏上に対して後醍醐天皇は何か変わったということは？

清水　残念ながら、このときにはもはや政権は軌道修正不可能な状態で、顕家も一週間後に討ち死にしてしまうので、結局この奏状は実らないんです。ただこれは破り捨てられたわけではなく、醍醐寺に伝わっています。醍醐寺は後醍醐天皇とつながりの深い寺なので、おそらく後醍醐もちょっと負い目があったので、まあお寺さんに納めて供養しておこう、という思いがあったんじゃないかと思います。こういう人間ドラマがあるものですから、今、南北朝・

著作権の関係により
表示できません

©松井優征／集英社

室町時代は漫画になったりして結構人気なんです。北畠顕家もかなりの人気みたいですよ。

貫首　私は見てはいないんですけど、こうキャラクターになって、美男子で描かれてるっていう話を聞きました。

清水　実際に後醍醐天皇も可愛がるぐらいの美少年だったみたいです。教養高くて合戦にも強くて、美少年。

貫首　いくら可愛がっていたにしても、一度出兵して陸奥に戻ったところでまた呼び出されるなんてね。

清水　後醍醐天皇も割と気軽に呼ぶものですから、顕家さんも大変だっただろうと思うのですけど。

貫首　その出兵の際には、陸奥の兵を連れて行くわけですか？

清水　多分そうだと思います。顕家軍の強さの秘密は馬だっただろうと言われてますね。陸奥の馬はやっぱり一番頑強なので、機動力が違います。とはいえ、陸奥から関西まで何度も呼び出されるわけですから、さすがの顕家もいろいろ不満もあって、こういう文章が出てくるんですよね。

陸奥国

貫首　先ほど陸奥の馬の話にも触れて頂きましたが、奥州藤原氏の時代の陸奥や平泉の豊かさについてお伺いしたいのですが。

清水　歴史学では最近は気候環境などの研究が進んでまして、その成果によると、平安後期はけっこう温暖な時代だったようです。東北地方にこれだけの文化が花開いた理由も、当時、地球環境全体が温暖化

に向かっていて、そのため稲作可能なエリアの北限が上昇していった。で、そのおかげで東北地方が様々な富を生み出すフロンティアとして注目されるようになっていったのだと思います。一方、同じ時代の京都の平氏政権などは、干ばつで相当苦労しています。今でも西日本は温暖化が進むと干ばつのリスクが高まるのに対して、関東や東北はむしろ温暖化で恩恵をこうむる傾向があります。平安末期に京都の中央政権が衰退し、東北や関東に独自の権力体が生まれでた大きな原因も、そうした気候条件は無視できないと思います。

貫首　そうすると、もちろん支える庶民もそれなりに潤（うるお）ってきて、ということになりますね。

清水　もちろん庶民の豊かさ無しに社会の発展は考えられないでしょうね。とはいえ、庶民の歴史というのはなかなかわからなくて、特に平安・鎌倉の庶民の歴史、まして東日本には庶民生活をうかがわせる史料が本当に残っていないんですね。そうしたなかで、中尊寺の場合は、骨寺村荘園遺跡（一関市厳美町本寺地区）に関する古文書と絵図が残ってるのは素晴らしいですね。しかも、現地に伺うと絵図と実際の風景が同じなので、初めて行ったときは驚きました。あの絵図自体はラフな絵ですよね。だから、最初はそんなに期待していなかったのですけど、今でも山の形や寺社の位置などが同じなんですよね。今、平泉に観光で来られる方で、骨寺まで行かれる方はそんなにいらっしゃらないですか。

骨寺荘園絵図

貫首　いや、少ないんですね。本当に歴史に興味を持っ

てきた方だけだと思います。

清水　もったいない…（笑）。私としては是非行っていただきたい場所ですね。

貫首　今先生おっしゃった荘園の地図と言いますか、当時の様子が描かれているものっていうのは、東日本ではあまり無いのでしょうか。

清水　少なくとも東北地方の農村を描いた荘園絵図というのは、他にありません。貴重だと思います。

貫首　やっぱりそれだけ中尊寺との繋がりにおいて、骨寺は重要な位置を占めていた。

清水　奥州藤原氏が滅ぼされた後、中尊寺が鎌倉幕府の時代を生き残るというのは、やはり大変な苦労があったのだと思います。そのなかで、荘園というのは土地の利権そのものですから、どうしても守り抜かなければいけないという思いがあって、様々な文書や絵図を作成し、また後世に残したのだろうと思います。

貫首　奥州藤原氏百年の栄華というようなことをよく言いますけれども、その長さだけに限らず、その価値というか、本当にそういった世界が存在したというのは、歴史の中で、どんな評価があるものなのでしょうか。

清水　古代国家というのは、なにごとも都が全ての中心で、物資も文化も情報も都に集まるわけです。そのなかで、その古代の終わりに地方の独自性みたいなものが生まれたというのは、次に来る中世という時代を象徴する面白い現象ですよね。

貫首　他に例はありますでしょうか。

清水　これだけ政治・経済・文化の面で独自性を発揮した地方権力体は、他には無いのではないでしょうか。なにせ源頼朝が平氏に勝っても上洛を躊躇った最大の理由は、鎌倉を留守にすると秀衡が南下してくるかもしれないという恐怖ですから。それほど警戒される勢力は、あの時代に他に見当たりませんね。

平泉伝承

貫首　事前にいくつかの資料を共有させて頂きましたが、川西大念仏剣舞の縁起については、郷土芸能と

念仏剣舞の猿
川西大念佛剣舞保存会提供

いう庶民の伝承の中にも怨親平等の考えが根付いているというところに価値を感じるのですが。

清水　読ませて頂きました。清衡さんが夜な夜な前九年・後三年合戦の亡者にうなされる。はじめは家臣とともに成敗しようとするのだけど出来ない。そこでお坊さんに相談して、山王権現に七日間こもって祈願すると、満願の日に猿が現れ、念仏踊りをしながら亡者を引き連れて猫間ヶ淵に消えていった。猿が遺していった舞扇には「永代供養」と書かれていた、と。ここで活躍するのが、お猿さんというところが面白いですね。比叡山の鎮守でもあります日吉山王権現の使いは猿なので、天台宗と親和性が高いですよね。ですから、あのキャラクターがお猿さんというのは、そこに天台宗信仰との繋がりを想像させます。供養願文を庶民が目にすると言うことはほとんど無かったでしょうけれども、郷土芸能という形で怨親平等の考え方が地元に伝承されてきたというのも注目されます。

貫首　今でも八月に施餓鬼会という法要がありまして、その後に奉演していただく習わしになっています。先祖供養ですね。

清水　川西というのは具体的な地名なのですか。

貫首　関山の麓を衣川が流れていて、そこに市町村合併前には衣川村がありました。そこに川西と呼ばれる地域があります。

清水　地元の伝承というのも重要ですね。私は東京の府中に住んでいますが、府中市で一昨年まで『新・府中市史』という自治体史の編集をやっておりまして、その編纂委員を任されていました。編纂作業を

十年ぐらいずっとやっていたのですけれど、さきほど言ったように東日本というのはどうしても古文書が少ないんです。そこで、同時代の古文書に限らず、怪しげな伝説も含めて幅広く情報を集めようという方針で、史料編では江戸時代の文献に書かれた民話や伝説なども全て盛り込んで紹介することにしました。すると、私の住んでいる土地も意外に平泉とご縁があることが分かりまして。今日はそれが一番ご報告したくて来たのですが（笑）。府中市内に、今も「車返（くるまがえし）」という地名があるのです。多摩川が東京と神奈川の間を流れてるわけですけど、その多摩川を府中から神奈川方面に渡る手前のあたり（市内白糸台・押立町付近）を「車返」と言います。そこは河岸段丘で崖になっているので、大八車を引いてきても危ないので途中で引き返さざるを得ない。で、「車返」という地名がついた、と地元では言われています。ただ、江戸時代の地誌（『新編武蔵風土記稿』『武蔵名勝図会』など）を読んでみますと、それとは別にもう一つの説がありまして。

源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼした時に、戦利品として平泉から藤原秀衡の阿弥陀如来像を略奪して、鎌倉に持ち帰ろうとしたと。そこで大八車に阿弥陀さまを乗せてガラガラ運んでいたところ、なぜか多摩川の手前で車がまったく動かなくなった。これはダメだ、阿弥陀さまのバチが当たるぞ、というので慌ててUターンした。そこで「車返」という地名がついた、というのです。Uターンした場所には、畠山重忠がお堂を建立したと伝えられています（『新・府中市史　中世史料編』「伝承・創作」参照）。

貫首　そうですか。その車返の場所というのは今橋がかかってますか？

清水　はい、少し脇に稲城大橋という橋がかかっています。史料編が出来上がりまして、奥州藤原氏について長年ご研究されている入間田宣夫先生（東北大名誉教授）にお送りしたところ、入間田先生にもとても喜んでいただきまして。「東京にも、こんな平泉伝説があるんですか」ということを仰って頂きました。

貫首　その阿弥陀如来をお祀りしたというのは？

清水　八幡山本願寺（府中市）という浄土宗のお寺さんです。最終的に阿弥陀如来像は来た道を引き返して、現在の埼玉県所沢市山口の大光山来迎寺というお寺に安置されることになり、そちらには今も秀衡所縁の伝説とともに仏像が伝えられているそうです。まあ伝説なもので、真偽のほどはわかりませんが。でも、府中には鎌倉街道が走っていまして、それが鎌倉と奥州をつなげる道であったことは確かです。そうした立地条件のなかで、遠く離れた地にも奥州藤原氏の伝説が語り伝えられているというのが、私にはたいへん興味深いことだなと感じられました。

貫首　そういう話っていうのは、いつ頃出来たんでしょうね。江戸時代とか。

清水　江戸時代の中頃ぐらいですね。ですから、我々が思うよりも、意外に奥州藤原氏の記憶というのは東日本に色濃く残っているのではないかと思うのです。もっとその気になって探すと、まだまだいろいろ出てくるんじゃないかと。

貫首　いわゆる説話集とか、そういったものの中にもあるのでしょうか。

清水　はい。江戸時代になると、日本中で地域の伝説を地誌などに書き残そうという機運が高まるのです。ただ、歴史学者は「伝説」というと、どうしても眉にツバして遠ざけてしまうのですが、真偽はともかく、それが語り伝えられたという事実自体は非常に重要なものだと思います。江戸時代の人々は決して奥州藤原氏の存在を知りもしなかったわけではなくて、武蔵国の人々にも「頼朝を畏怖させるほどの権力体がかつて奥州に存在した」という認識がなければ、こうした話は生まれないわけです。そういうのをもっと意識的に拾っていくと、面白いんじゃないかなと思いますね。

貫首　本日は先生と、様々なお話しが出来て有意義な時間が過ごせました。

清水　お声がけ頂いてありがとうございました。私の

方こそ、世界遺産中尊寺のなんたるかが、少しわかった気がしました。また学生を連れて伺いたいと思います。

貫首　春には供養願文を二通並べて公開しますし、夏からは秘仏一字金輪佛頂尊の御開帳もありますので、是非おいで下さい。ご案内しますから。

清水　ありがとうございます。どちらも魅力的なので、春と夏、いつ伺うか迷ってしまいますね。

天の時は地の利に如かず
地の利は人の和に如かず　孟子

天の時（好機）より、地の利より、人の和が最も大切である

著作権の関係により
表示できません

©逃げ上手の若君
松井優征／集英社

清水　克行 教授

しみず・かつゆき

一九七一年、東京生まれ。明治大学商学部教授。専門は日本中世史。立教大学文学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。著書『喧嘩両成敗の誕生』『室町ワンダーランド』など多数。NHKの歴史番組『先人たちの底力　知恵泉』『歴史探偵』などにも出演。『中尊寺金色堂　デジタルで解き明かす900年の謎』では進行役を務めた。

著書『室町ワンダーランド』
文藝春秋社

第六十四回　平泉芭蕉祭全国俳句大会　特別講演

「戦争と俳人」

講師　白濱一羊 先生

今日、六月二十九日は「平泉の日」で、平和を祈念するという中尊寺の「供養願文」の趣旨を承け継いだ日です。けれども、昨今の世界情勢は、平和とは逆方向へどんどん行っている感じですね。国同士の争い、自国第一主義、あるいは右翼化傾向と、日本もそうではないと言えない状況になってきているのでは。そこで俳句に絡めてお話してみようかということで今日のテーマにしました。

第二次世界大戦前に急激に盛り上がった新興俳句。ブームになって、そのままの勢いで行くのかと思われたわけですが、政府と軍部によって弾圧を受ける、新興俳句弾圧事件。主に京大に拠点を置いていたので京大俳句事件というふうにも言われました。で、なぜ俳句が弾圧されたのか、その新興俳句というものがどういうものだったのかということを、今日は中心にお話したいと思います。

花鳥諷詠で知られる高濱虚子主宰のホトトギスが、当時すでに、全盛期を通り過ぎようとしていたのです。弟子の筆頭の水原秋桜子がホトトギスを離れ、同人だった日野草城は除名されて、そうしたホトトギス離れの動きから新興俳句が始まっていった。大正九年、草城と鈴鹿野風呂が中心となり京大三高俳句会を創設。一度解散しますが復活。そこに野風呂、草城、秋桜子や山口誓子といった、そうそうたるメンバーが顧問になって、新興俳句の拠点になりました。

ところが、昭和十二年七月七日、盧溝橋事件が起きまして、それから日中戦争、太平洋戦争、第二次世界大戦と、昭和二十年八月に終戦になるまで続くわけです。俳句総合誌『俳句研究』の昭和十三年九月号に、「俳句　麦と兵隊」という特集が組まれました。これは、

講演の様子

火野葦平の大ベストセラー小説『麦と兵隊』にあやかって（当時一二〇万部も売れたそうで）、草城や渡辺白泉、東京三の三名の俳人にその小説を読んで俳句を作ってもらったのです。

戦場へ手ゆき足ゆき胴ゆきぬ　　渡辺　白泉

詠者は、戦場に行ってない。こういうふうに、実際に戦地に行かないで、想像して句を作ることを戦火想望俳句というふうに言うんです。

戦争の俳句は、大きく三つに分けられまして、戦火想望俳句は行ったことがないけれど想像して詠んでいます。前線俳句は、戦地や訓練地で詠んだものです。

てんと蟲一兵われの死なざりし　　安住　敦

敦は爆弾を抱えて敵の戦車に体当たりする訓練をしていた。それから、銃後俳句は戦争に行かない、家庭に居る妻とか子供、年寄り。そういう立場、視座から戦線に出て行った人のことを思って、作った俳句です。

戦争が廊下の奥にたつてゐた　　渡辺　白泉

俳句じゃないんですが、盛岡縁の川柳作家鶴彬に、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という有名な川柳があります。先の、白泉の句にちょっと似てますよね。で、この鶴彬は、昭和十三年に治安維持法で捕まって亡くなっているんです。拷問を受けたわけではなかったが、病気が悪化して亡くなりました。

昭和十五年二月十四日、「京大俳句」の会員八名が検挙されて、廃刊になります。新興俳句弾圧事件の始まりです。西東三鬼と石橋辰之助が中心となって「天香」という雑誌を創刊したんですが、これも弾圧を受けて三号で廃刊に。「天香」の関係者も六名、検挙されています。

独り捕まらなかった「京大俳句」の西東三鬼も、八月三十日に検挙されました。が、こうした事態は京都以外ではあまり知られていなかったようです。

そして、この年の十二月に日本俳句作家協会の創立をみる。会長が高濱虚子、理事に富安風生・臼田亜浪・荻原井泉水・水原秋桜子他。当時の俳人は、皆ここにいれられています。そのモットーは日本文学としての伝統を尊重する健全な俳句の普及にあった。文化的にも挙国一致の体制にしようという、俳句作家協会の創立はその象徴なんですね。常任理事の小野蕪子は、「鶏頭陣」を主宰していて、その編集後記に「近来俳句の危険思想に対して当局が目をつけてゐるとのこと故、吾等は清く豊かな俳句に進まう」と記しています。しかし、これには厳しい批判もありました。

翌十六年二月、「土上」の嶋田青峰や「俳句生活」の栗林一石路、橋本夢道ら四俳誌の十三名が検挙されております。夢道、一石路はプロレタリア俳句運動の中心でした。で、七人が懲役二年、執行猶予三年。その判決が下りるまでが長いんですね。

そして十二月八日、真珠湾攻撃で、ここから太平洋戦争に入っていきます。

十二月八日の霜の屋根幾万　　加藤　楸邨

十七年「鶴」四月号に、石田波郷が宣言を出します。「俳句の韻文精神真徹底」、「時局社会が俳句に要求するものを高々と表出すること」と。翌年、その波郷に召集令状がきて、こう詠んでいます。

雁（かりがね）やのこるものみな美しき　　石田　波郷

しかし、ますます締め付けが厳しくなって、俳句作家協会は日本文学報告会という組織の俳句部門になるんですね。

昭和二十年八月十五日、太平洋戦争終結です。翌年、新俳句人連盟の結成で、当時の俳人が一旦結集するんですが、その創刊号に俳壇戦犯問題が取り上げられまして、主立った人たちが挙げられます。虚子、風生、秋桜子、山口青邨も加藤楸邨も、大野林火、「ホトトギス」の同人だった前田普羅も、飯田蛇笏や中村草田男も入っているというふうに、メジャーな俳人の名が挙げられますが、その新俳句人連盟が分裂して、それ以上は追求されずに、なし崩しになったのです。

「京大俳句」で活躍した井上白文地（はくぶんじ）は、四十一歳で戦争にとられて朝鮮で終戦を迎え、ソ連の捕虜になって抑留され、そのまま行方不明に。

東南アジアに送られた人は、みな悲惨でした。

片山桃史（とうし）はニューギニアで戦死。鈴木六林男（むりお）はフィリピンで激戦中に機関銃で右腕を撃たれ、森澄雄は、ボルネオで死の行軍を経験させられました。そして、金子兜太はトラック島で餓死しそうになった。部下が大勢、餓死しているんですね。米軍捕虜となり、最終復員船で帰国した際に詠んだ句がこれ。二十一年十一月でした。

水脈（みお）の果て炎天の墓碑を置きて去る　　金子　兜太

虚子が戦後、朝日新聞の取材を受けて、「あなたにとって戦争は何でしたか？」と訊かれて、「俳句は、戦争とは一切関係無い。私の俳句は戦争に影響されていない」というようなことを言ったのは有名な話なんですが。要は、私は戦争に加担などしていませんということを言いたかったのでしょう。

ここで、長谷川素逝（そせい）について話しておきたいと思う。素逝は、中国を転々として、戦争前線俳句の花形でした。『砲車』という句集を戦争中に出して、国民的人気が高かったのですが、戦後、戦争に関係のない三句だけを残して全部捨てました。「ホトトギス」の俳人で、一旦は「京大俳句」にも入るんですが、やっぱり有季定型で行くんだと、「ホトトギス」で活躍します。中国に行って砲兵隊に入って、

凍土揺れ射ちし砲身あとへすざる

というような、生々しい句を詠んでいます。ところが戦後、病気でずっと、療養生活をしながら、清澄な叙情の句を詠んでいたのですが、二十一年十月、三十九歳で亡くなった。亡くなる前年に詠んだ句が、

弟を返せ　を月に呪ふ

さて、この句、何を呪うと詠んだものか。考えてみてください。そしてその素逝の死を虚子が深く惜しんで

まつしぐら炉にとびこみし如くなり　　高濱　虚子

という追悼句を詠んでいます。

最初に話したように、昨今、いろいろときな臭いご時世ですが、

蝉時雨もはや戦前かもしれぬ　　摂津　幸彦

これは三十年くらいも前の句です。もう、その頃から感じる人は感じていた、ということですね。

世の中きな臭いにおいに敏感に反応するのは、文化人でなければいけない、ということです。

ほら、「炭鉱のカナリア」という言葉を知っていますか。炭鉱のトンネルに入るときはカナリアを連れて行く……。炭鉱のカナリアに俳人も文化人もならなきゃならないんじゃないか、というようなことも言われています。

皆さんにも、日常生活のなかで考えていただければと思います。

しらはま　いちよう
岩手県奥州市出身。
「樹氷」主宰　岩手県俳人教会会長
句集『喝采』など

比叡山宗教サミット「世界平和祈りの集い」

破石晋照

二〇二五年八月四日、比叡山延暦寺にて三十八周年の比叡山宗教サミット「世界平和祈りの集い」が行われました。この祈りの集いは一九八六年にヨハネ・パウロ二世の呼びかけで、さまざまな宗教代表者がイタリア南部のアッシジに集い「平和の祈り」を行ったことに始まります。当時の山田座主猊下はこの祈りの集いに参加され『伝教大師の開かれた比叡山は、世界の宗教者がその垣根を越えて集い、祈りをささげる場所にふさわしい』とのお考えの下、翌一九八七年「比叡山宗教サミット」を発願されました。

それから三十八年、移り行く世界情勢の中で毎夏多くの方が延暦寺に集い祈りをささげ、今開催についても四〇〇人以上の参加者が集まりました。私がこの平和の式典に初めて参加したのは何年も前のことですが、山田前貫首に随行して参加させていただきました。国際交流、国際平和に尽力なさった前貫首からの「私がいなくても、この式典には毎年参加すると良い、そのありがたさにやがて気づくから」という言葉とともに背中を押して頂き、以来八月四日は登叡の日と決まってしまいました。と言っても一年に一度必ず比叡山に上るきっかけができ、気持ちをあらたにするいい機会が作れると、今となっては年一回の登叡は私の楽しみとなりました。

参加したのは十年足らずですが、本年が三十八周年ということですから、私が小学校に入学したころに第一回が行われたことになります。第一回の開催以来、実に多くの方々が開催の継続にご尽力され、そして比叡山は毎年参加される人々の平和の祈りを受け止めてきました。その積み重ねられた祈りは、個人や一年単位の出来事ではなく、宗教が担うべき普遍的な課題を示していると実感させられます。

延暦寺会館で行われた式典では、細野舜海宗務総長の挨拶に続き、ノーベル平和賞を受賞された日本原水爆被害者団体協議会の田中熙巳（てるみ）氏が講演されました。田中氏はご自身の被爆体験を語る中で、「被爆国に生きる我々が記憶を継承し伝えていくことこそが平和への大きな運動である」と述べられ、宗教という有形無形の混在した伝承の世界に身を置く者として、心に深く残る言葉でした。

続いて一隅会館前で行われた「平和の祈り」では、若い宗教者による「比叡山メッセージ」の朗読が行われ、平和の鐘が鳴り響く中、参加者全員で黙とうを捧げました。八月の暑い最中に行われたサミットで、国も宗教も異なる人々が同じ場所に立ち、平和の祈りを共有する場は、比叡山の空気と相まってとても静謐な空間となっていました。

宗教はそれぞれに教えの違いや言葉の違いがありますが、「平和を願う」という点では共通しています。そのことはこれまでも語られてきましたが、実際にそれを形にしていくことは簡単ではなく、今なお宗教者一人ひとりが模索を続けていると言えるでしょう。今回の田中氏の講演で語られた「記憶を継承する」という視点は、その模索に向けて具体的な行動につながる示唆を含んでいました。祈りは形だけでは受け継がれず、記憶も語られなければ次世代に渡りません。祈りと言葉と記憶が結びつくことで、初めて平和への歩みの一部になるのではないかと感じました。

比叡山で三十八年間続いてきた祈りの営みは宗教が本来担うべき普遍的な課題を示しています。世界の情勢が揺れ動く中にあって、祈りの意味は決して小さくないことを、参加者があらためて確認する場となりました。

（金剛院副住職）

令和七年度讃衡蔵展示文化財調査中間報告

菅野澄円

讃衡蔵常設展紹介

東京国立博物館が文化庁の日本博事業の一環として、金色堂須弥壇格狭間の孔雀を復元し、その一部を令和七年三月から讃衡蔵で展示公開している。京都市東風美術工芸㈱中村鎚舞氏による製作工程が動画で解説されている。模刻の孔雀は手で触れることができるのでこの機会に是非讃衡蔵で御体感頂きたい。

孔雀（復元）

讃衡蔵ナイトミュージアム　―ギャラリートーク―

十一月六日、午後五時より、東京国立博物館の清水健研究員による展示解説が行われた。参道ライトアップ紅葉銀河期間中ということもあり、約七十名の方が参加され、熱心に解説を聞いていた。

金色堂LED照明交換

金色堂内のLED照明の更新作業を行った。昭和～平成と永らく美術品用蛍光管を使用してきたが、平成十二年度にLEDへ変更。そして今回初めてLED器機の交換を行った。二〇一四年に中村修二氏が高輝度青色発光ダイオードでノーベル賞を受賞された事を記憶されている方も多いと思う。もはやLED照明なくして私達の生活は成り立たないほどである。文化財・美術品を照らすことにおいても、この十数年の進化はめざましいものがある。

東京国立博物館様には、機材更新のアドバイスを頂き、LED機材は㈱キルトプランニングオフィス様のご提供を頂いた。御礼を申し上げる。

金色堂九〇〇年記念「金銅華鬘全六面調査」

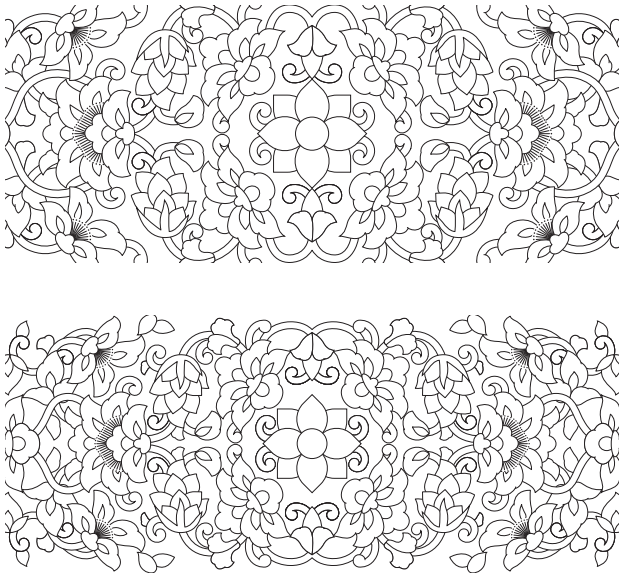
金銅華鬘全六面調査

令和六年九月専門家による調査を行った。調査研究者は、加島勝（大正大学）、清水健（東京国立博物館）、永井美由紀（美術史学会会員）、泉武夫（東北大学名誉教授）各先生。本年度は、早川泰弘（東京文化財研究所）先生による蛍光X線分析の調査結果も揃い、各先生による考察が行われている。近く中尊寺仏教文化研究所論集五号として刊行される。

金銅華鬘模式図

経蔵彩色調査

令和六年度より、仏教美術史の第一人者、泉武夫（東北大学名誉教授）を中心に、加島勝（大正大学）、大島幸代（大正大学）各先生の協力を得て研究を進めていただいている。宇治の平等院鳳凰堂など近年の研究成果も参考に、線画・彩色の復元に取り組んでいただいた。こちらも近くご報告・展示の機会を持ちたいと考えている。



経蔵彩色模式図

中尊寺本堂表門（県重要文化財）解体修理

令和七年度から本格的な工事に入り、御参拝の皆様にはご迷惑をお掛けしている。令和八年五月の完成予定。解体で確認出来た事項、またクラウドファンディングという現代の仕組みを活用した報告は本書八十三頁にてご報告する。

中尊寺建立九百年記念展示予告

中尊寺建立供養願文　輔方本　顕家本同時展示

讃衡蔵

令和八年三月二十四日～五月十日

中尊寺建立供養願文は、九百年前の中尊寺落慶供養の史料にとどまらず、奥州藤原氏と朝廷との関係性や、鎌倉時代以降に如何に中尊寺が護持されてきたのかを知る手がかりとなる貴重な文書である。九百年を記念し二通を同時に公開する。

「経蔵と紺紙金銀字交書一切経」展

讃衡蔵

令和八年十月十九日～十一月十五日

紺紙金銀字交書一切経は清衡願経とも呼ばれ、初代清衡公によって書写が進められた経文である。建立九百年を記念し、紺紙金銀字交書一切経数巻を展示するとともに、中尊寺経が納められていた経蔵についても解説展示を行う。

境内管理報告

参道雨水処理事業

地球環境の変化と共に、中尊寺境内でも従来では想定し得なかった集中豪雨が発生し、その頻度も上がっている。直近では令和五年八月の集中豪雨により、通称「望古台」と呼んでいる参道北東側の斜面が崩落した。その復旧は令和六年度に完了しているが、今後起きうる降水量に対応する為、令和七年度より参道の改修を進めている。これは文化庁の補助を受けながら令和九年度までの三カ年で進めていく予定である。

防火水道設備劣化の問題

中尊寺の防火水道設備は、昭和三十一年から三カ年事業で国庫補助・岩手県補助、残りを中尊寺が負担して行われた。既に六十八年が経過している。この間、漏水やポンプの不具合などについて更新はされているが、国内の水道事業が抱える問題と同じく、地中水道管の更新は避けて通れない仮題である。現在、平泉町と現況調査を進めているが、更新に向けた具体的計画作成へと進めてゆきたい。

（管財部執事）

楽しかった山田前貫首と過ごした平泉世界遺産応援団の日々

平山健一

一　北上川治水事業と平泉文化遺産

十二世紀のはじめ奥州藤原氏初代清衡公が江刺郡豊田館から居を移した平泉は北上川狭窄部の上流に位置し、舟運の便が向上し中央への結びつきが強まっていきました。各地との交易により様々な文化が導入され平泉藤原家四代によって仏教文化が開花しましたが、源頼朝の圧力により一一八九年、藤原氏は滅亡し中尊寺は葛西氏の庇護を受けることになり、中世約三〇〇年の間、戦乱や貧困を乗り越えて近世までの苦難の歴史を耐えてきました。

ようやく昭和二十五年文化財保護法が施行され、金色堂須弥壇の内部に八〇〇年の間、安置されてきた平泉藤原氏四代のご遺体などの学術調査が行われました。昭和三十三（一九五八）年には中尊寺は天台宗東北大本山の称号を認められ昭和三十七（一九六二）年には金色堂の解体大修理が行われ創建当時の輝きが戻ってきました。

また東京大学名誉教授の藤島亥治郎先生等によって、「岩手県平泉埋蔵文化センター」などの支援を得て調査が続けられていましたが、さらに昭和六十三（一九八八）年から一関遊水地事業のバイパス工事に伴う、建設省の柳之御所跡・緊急発掘調査が開始されることになったのです。調査が始まると、間もなく遺跡を囲む大規模な堀跡や、夥しい量の「かわらけ」や木製品が発見されるなど、平泉藤原氏の貴重な遺品や遺構が続々出現し、研究者はもとより地域社会からも遺跡の永久保存を求める声が高まり、バイパス事業の大幅な計画変更を求める動きが拡がっていきました。

一関・平泉地域は北上川の洪水常襲地帯といわれ、昭和二十二年、二十三年にカスリン・アイオンの二つの台風によって大きな被害を受けており、北上川の治水事業を営々として進めてきた建設省は歴史的文化遺産の保存と治水の

両立という難しい課題に直面しましたが、平成七年七月に柳之御所遺跡の永久保存を可能とするように、「堤防を最大一四〇ｍ東側に移設する」という計画の変更を決断しました。

技術的にも難しく事業費も時間も必要とする大きな決断でしたが、この計画変更によって埋もれていた平泉文化遺産は再び輝きを取り戻し平成九（一九九七）年に国の史跡に指定され、平成十三（二〇〇一）年にはユネスコ世界遺産センターの暫定リストに登録されるなど、世界遺産誕生への期待が高まっていきました。当時の千田孝信貫首は建設省の決断に対していつも感謝の言葉を忘れることがありませんでしたが、遊水地事業の促進と世界遺産の実現を目前に地域の新しい姿が求められていたのです。

二　北上川リバーカルチャーアソシエーション（略称「北上川ＲＣＡ」）の誕生

一関市内でベリーノホテル一関を経営していた齋藤哲子さんは、若い頃、オーストリアで声楽家としての道を歩んでおりましたが、お兄さんの急な不幸のため帰国して家業のホテル業を引き受けることになった経歴の持ち主です。

齋藤氏はその豊かな国際経験を活かして国土交通省、岩手大学、岩手県などの地域づくりや川の活用などの様々な会議に於いて民間委員として活躍していましたが、代々のエジプト大使との幅広い人脈を活かしてナイル川と北上川の姉妹河川協定を結び、四大文明といわれるナイル川に育くまれた歴史文化を学びながら、平泉文化遺産の世界遺産登録を実現し、歴史と文化を尊重する多文化共生の地域づくりを目指そうとする構想を持っておりました。

夢のような齋藤氏の提案はエジプトとの交流という珍しさも手伝って人々を引き付け大きな市民活動に発展していきました。中尊寺・毛越寺をはじめ、岩手県の行政・経済界・大学・国際交流などの多方面から支援の動きがあり、エジプト大使館や国土交通省などの指導を受けながら準備を重ねて、平成十五（二〇〇三）年二月、市民団体「北上川リバーカルチャーアソシエーション」（以降、「北上川ＲＣＡ」と略称する）は発会を迎えることになりました。会の代表は岩手大学長であった平山健一が務めることになり、事務局長・理事の齋藤哲子氏を中心に動き易い組織をつくることが出来ました。

北上川とナイル川の姉妹河川協定の締結については、エ

エジプト大使館で行われた協定締結

ジプト大使館より「ナイル川・河川環境・保全協会」という団体の推薦を受けて、平成十五（二〇〇三）年三月十七日京都で開催中であった第三回世界水フォーラムの会場において、来日した相手団体の会長アブデルアテイ・エル・シャフェイ氏と合意文書に調印し、北上川とナイル川の結びつきが正式なものとなりました。

調印式には、エジプト政府の水資源灌漑大臣で、開催中の世界水フォーラムの共同議長でもあるマハムード・アブゼイド閣下、協定のきっかけを作ったカレムエジプト大使、日本側から岩城光英国土交通大臣政務官、そして齋藤哲子氏等が立ち会い、多数の来賓の陪席の下で市民活動としては破格と思われる雰囲気の中で調印式が行われました。

シャフェイ会長は京都での調印の後、一関市を訪問して北上川を視察し、丁度開館一周年を迎えた「北上川学習交流館（あいぽーと）」で岩手工事事務所が開催した「ナイル川・エジプト展」の開会式にも出席しましたが、北上川とナイル川の交流の岩手県民へのお披露目となりました。

三　北上川ＲＣＡの活発な活動

北上川ＲＣＡは「エジプトとの国際交流」、「川から学ぶ地域づくり」、「平泉文化遺産の登録」という三つのテーマを掲げて早速活動を始めました。まず各界の優れたリーダーをお招きして基調講演を行い、続いて関連のテーマに

ついてパネル・デスカッションで深め合う「北上川フォーラム」をこれまで十回にわたり実施してきました。

平成十五（二〇〇三）年十二月七日に開催された第一回北上川フォーラムでは、エジプト古代遺跡の発掘調査ではＴＶでもお馴染みの早稲田大学の吉村作治先生を迎えて行われました。吉村先生は「古代エジプト社会はナイルの穏やかで循環する流れによって育てられ、古代エジプト人は来世を信じる日本人と似た生死観を持っていた。エジプトの世界文化遺産から是非自然との共生を学んでほしい」と北上川ＲＣＡのスタートにあたってお祝いの言葉を贈って頂きました。

これまでの北上川フォーラムにはＪＲ東日本社長・日本ユネスコ協会連盟会長の松田昌士（まさたけ）氏、元国際連合事務次長明石康（やすし）氏、元文化庁長官近藤誠一氏、などを講師にお呼びして講演をお願いしてきましたが、毎回多くの参加者があり大きなインパクトを地域社会に与えていきました。

また地域の課題を敏感に捉え、自ら、考えるため二時間～三時間程度の文化セミナーをこまめに開催して参りました。現在まで五十四回の講演を企画してきましたが回数を重ねるにつれて、流域社会と川との深い関係や平泉文化遺産の貴重さに対する理解が深まっていったように感じています。

次に、会の発足から二年弱が経過した平成十七（二〇〇五）年一月二十二日～三十一日、十九名の会員による第一回目のエジプト訪問が実現しました。二年前に日本でお会いしたナイル川・河川環境・保全協会のシャフェイ会長などへの返礼を兼ねた初めての訪問でしたが、旅行中に二回も行われた歓迎レセプションではエジプト政府の皆様をはじめ、カイロ大学や新聞社など沢山の皆様からの大歓迎を受け遠来の訪問団を暖かく迎えて頂きました。エジプト側の歓迎には日本の戦後復興に於ける国民の努力への尊敬や日本との交流への期待が強く感じられました。

エジプト文明を支えたナイル川はアフリカ大陸の東部を南から北に向かって十ヶ国を通過して地中海に注いでいます。流域面積二八七万平方キロ、流路長六、七〇〇㎞の大河です。下流のエジプトやスーダンでは年間の降水量は一〇〇㎜以下で、その大部分は蒸発して失われてしまい、飲み水も灌漑用水もすべての水は上流域の国に降った雨に頼らなければなりません。現在もナイル川の利用について上下流諸国との間で調整が行われていますが、エジプトの唯一の水瓶であるアスワン・ハイダムや水利施設を守っている軍隊の物々しさや、ナイル川の夕暮れに集う人の多さに、「エジプトはナイルの賜物」という言葉の重さを実感し、ナイル川に対するエジプトの人々の深い愛着を感じました。

ナイルの川沿いに残る五千年の歴史を持つ大ピラミッドや神殿、石像の巨大な姿から当時の王様の大きな力が想像でき、また王墓の壁や天井に残された鮮やかな壁画や繊細な細工の副葬品から技術の伝播や自然と共存してきた人間の知恵の凄さを知り、世界文化遺産とは何かについて考える機会となったエジプトの旅でした。

四　世界遺産登録の延期と「ルクソール友好協会（略称）」の立ち上げ

平成十八年十月に中尊寺は千田孝信貫首に代わって山田俊和貫首をお迎えしました。山田貫首には平泉文化遺産の世界遺産登録という大きな期待が各方面から寄せられておりましたが、御多忙な時間を分けて頂き北上川ＲＣＡの行事にも出席いただいたことは我々の大きな励みとなっておりました。平成二十年五月、ユネスコ世界遺産委員会のイコモスの会議は「平泉―浄土思想を基調とする文化的景観」の遺産リストへの記載について「延期」という評価を下しました。期待が大きかっただけに思いがけない結果でしたが、北上川ＲＣＡにできることは限られており、初心に戻って平泉文化遺産についての更なる研鑽と発信に努め、二年後に良き結果が得られるように希望を持って活動を進めておりました。

年が明けて平成二十一（二〇〇九）年、エジプトとの交流が始まって五周年という区切りの年を迎え、北上川ＲＣＡは「ナイル川と北上川姉妹河川提携の意義と今後の展望」というテーマでマハムード・アブデルナーセル エジプト大使と達増拓也岩手県知事の対談を企画し、第六回目の北上川フォーラムを開催しました。

アブデルナーセル大使は北上川ＲＣＡのこれまでの活動を評価し、日本との科学技術交流について強い関心を示されましたが、加えて「文化交流の一環としてエジプトにおける世界文化遺産の中心地ルクソール県と一関・平泉地区のように文化遺産を持つ地域同士の連携が具体的になれば素晴らしい」と述べ、世界遺産では先輩格のエジプト側からの思いやりのこもった提案を頂きました。達増知事もこ

の提案を歓迎し、連携を推進していきたいとの意向が示され、平泉とルクソールが結ばれるきっかけとなった思い出深い対談となりました。

知事と大使の対談の成果をどのように具体化し、平泉の「登録」という目的に向けて活かしていくかについて、齋藤氏を通じて大使や、岩手県、一関市や平泉町等の意向を伺いながら検討を重ね、最終的には貫首にもご意見を伺い文化遺産の有する地域同士の国際交流であることを具体的に示すため、会の名称を「一関・平泉地域エジプト・ルクソール友好協会」(以降「ルクソール友好協会」と略称する)とした新たな組織の設立を決定しました。またこの新組織のトップの名誉会長を中尊寺山田俊和貫首に引き受けて頂き、貫首を中心に中尊寺・毛越寺、岩手県などが積極的に参画する形でスタートすることになりました。従来から活動を続けていた北上川RCAに加えて、新しい「ルクソール友好協会」という二つの組織ができましたが、出来るところから活動に取り組んで行きました。

五　ルクソール友好協会（通称）の活動

平成二十一（二〇〇九）年末、十二月十三日に開催された北上川RCAの第七回北上川フォーラムでは前回に続いてアブデルナーセル大使が「エジプト・ルクソールの魅力」という題で基調講演を引き受けました。ルクソールはカイロの南、ナイル川の上流六七〇㎞にあり、ピラミッドの時代に続く新王国時代の首都テーベと呼ばれていました。ナイルの東岸には太い石柱が林立するカルナック・アメン大神殿とルクソール神殿が、西岸にはツタンカーメン王の墓で黄金マスクなどが発見された王家の谷、ハトシェプスト女王・葬祭殿等がありエジプト観光の中心とされる地域です。年間一、〇〇〇万人以上の観光客が訪れ、ルクソールからエドフ、コムオンボなどの史跡に立ち寄りながらアスワンへ三泊四日の快適なナイル・クルーズの発着地となっています。さらに、当時日本からエジプトへの直行便が運航されており、ルクソール観光が日本からも身近なものになっていると力を込めて話され、一関・平泉地域とルクソール県の連携に強い歓迎のエールを送って頂きました。

続いて行われたパネル・デスカッションではNHKエンタープライズの大壇敦（おおかきあつし）氏からエジプト世界遺産の魅力について改めて紹介があり、続いて山田貫首からは金色堂須弥壇の平泉藤原氏四代泰衡（やすひら）公の首桶に残されていた「中尊寺蓮」と古代エジプトの国花のエジプト蓮という蓮（ロータス）をシンボルとしたルクソールと平泉を結んだ「平和と友好のネットワーク」をつくっていきたいと希望を述べられました。

また付図の年表に示すように山田貫首と共に菅原光中氏、佐々木邦世氏、藤里明久氏なども北上川フォーラムや文化セミナー等で講演の機会が増えていますが、一山僧侶を挙げての世界遺産登録へ向けた真剣な動きが伝わってきます。

さらに平成二十二（二〇一〇）年四月十～十七日には、山田貫首（ルクソール友好協会名誉会長）を団長として平山会長、齋藤副会長、菅原光中副会長、佐々木秀圓氏ら七名がルクソール友好協会の紹介と友好の促進を目的にエジプトを訪問しました。山田貫首は出発に先立って「一関・平泉地域エジプト・ルクソール友好協会設立にあたって」と「中尊寺ハスの贈呈にあたって」という説明文をしたため、英訳された文章は大使館を通じて訪問先に届けられました。平泉文化遺産の中心となる中尊寺について、一一二六年奥州藤原氏初代清衡公によって、戦乱の世あって武器を捨て、戦いを放棄し、多くの死者の霊を慰め、仏教によ

訪問団による達増知事への報告

る平和国家創設を願って中尊寺が建立されたことを強調しています。そして完全な姿で今日まで残った金色堂は当時の世界の最先端であった中国から伝来した螺鈿技法が駆使され、金や夜光貝がふんだんに使われていますがその技法の本源はエジプトにあることが説明されています。

また山田貫首によるとハスは一億年以上も前から地球にある植物で古代エジプトのロータス文様の柱頭の蓮台は有名ですが、古代エジプトを代表する植物としてパピルスと共にエジプトハス（ロータス）は現代に伝えられています。一方、アレクサンダー大王の東征によりハスはシルクロードを通じてインドに伝わり、仏教に広く取り入れられて気品ある姿が愛でられておりましたが仏教と共に日本にも伝えられました。平泉に至ったハスは中尊寺ハスと命名されて、山田貫首が手ずからのお世話によって永い眠りから覚めピンクの花を咲かせたことが紹介されています。

貫首は早速中尊寺ハスの写真をエジプト大使館に届けたと伺っていますが、エジプトを起源とするハスが八〇〇年前に大陸の東の端にある平泉にたどり着き、今回の交流によって再び発祥の地と結ばれたことは文明の伝搬を物語る証であり、蓮の花をシンボルとする一関・平泉地域とルクソールの世界遺産同士の連携の価値を高めるものでありましょう。

今回のエジプト訪問は八日間の日程で、農水省、ルクソール県庁、アル・アハラーム新聞社などを訪問し、中尊寺蓮の種を届け、達増岩手県知事、勝部一関市長、菅原平泉町長の親書を手渡して懇談をかさねました。訪問先からは「友好の盾」等の贈呈を受け、訪問団にとって今後の交流への期待やエジプトの世界遺産を実際に視察する良き機会となりました。

またアル・アハラームは発行部数一〇〇万部のエジプト最大の新聞社ですが、カイロの本社に副編集長のガバラ氏を訪ねました。ガバラ氏は、前に一度一関を訪れており、当会の活動をエジプトの全国に紹介して頂くなど、交流の良き理解者であり、蓮の花交流についても力強い応援を約束していただき、平泉の登録を期待しながら帰国の途につきました。

六　平泉世界遺産の実現から東日本大震災の復興支援へ

平成二十三（二〇一一）年三月十一日、東北地方太平洋岸を東日本大震災津波が襲い多くの命が失われ、みちのく

は悲しみのどん底にありましたが、同年六月二十六日ユネスコ世界遺産委員会は、平泉の文化遺産について平和を求める精神が深く息づいていることを認め、日本で十二番目、東北では初めての世界文化遺産が平泉に誕生することになりました。正式に準備が始って十年以上が経過しましたが、永い間この朗報を待ち望んできた中尊寺・毛越寺等の当事者の皆様はもちろん、応援してきた北上川ＲＣＡの会員にとっても喜びは大きく、これまでの活動を思いながら達成感を味わうことができました。

北上川ＲＣＡとルクソール友好協会はその後も活動を緩めることなく東日本大震災津波被害の慰霊や復興を願って支援活動を続けてきました。齋藤哲子氏がオーストリア在住の頃からの友人がウイーン・フィルの奏者として来日する機会に合わせて、中尊寺の協力を得て中尊寺レクイエムコンサートを中尊寺白山能舞台などで震災後九年間にわたり開催してきました。またエジプト大使館からの岩手・宮城・福島の被災地の高校生をエジプト旅行に招きたいという申出に応えて希望者を募り、高校生十二名、引率者・報道の合わせて十五名を派遣するなど尽力しています。

更にルクソール友好協会として二回目のエジプト訪問団

アジア担当大臣顧問との面談

が平成二十六（二〇一四）年十二月に派遣されています。訪問団には、山田ルクソール友好協会名誉会長、齊藤会長など会員五名と、岩手県地域政策部長の齋藤淳夫氏が世界遺産登録に於ける支援のお礼や今後の県レベルでの交流の拡大をめざして参加しました。アスワン県知事やルクソール県知事への訪問では山田名誉会長から見事に開花した両国のハスの写真を贈呈し、世界遺産のネットワークの強化や科学技術交流、物産交流、観光交流などの可能性についても懇談が行われました。またアスワンからルクソールへの船旅による史跡の視察後、カイロでは元駐日大使であった外務副大臣のバドル氏と会食を共にする機会を得ることが出来ましたが、この訪問により岩手県とルクソール県などとの今後の交流への期待が膨らみました。

交流の主役となったピンクの花をつけた中尊寺ハスと純白のエジプトハスは中尊寺・月見坂下の広場に展示され参拝者の目を楽しませてくれましたが、地域づくりの活動も世界遺産登録の喜びもまだまだ終わりではありません。活動は、今、次のステージにさしかかっているところです。これからも中尊寺建立供養願文に込められた清衡公の想いを伝達していくことが地域づくりの基本となると思いますが、次のステージを担っていただける新たなプレーヤーの出現を待っているところです。

七　山田貫首への感謝

齋藤哲子氏の提案から全てが始まった北上川ＲＣＡとルクソール友好協会の市民による活動はエジプト大使館・国土交通省・岩手県・地元市町村・中尊寺・毛越寺・市民の皆さんの絶大な支援の下、川を愛する多くの仲間と共に進めてきたボランテア活動でした。いつも「やり甲斐」を感じ、思い出の詰まった楽しい時間でした。

山田貫首の変わらぬ笑顔と激励の言葉は我々の自己実現を力強く膨らませ、活動に格別の元気を与えて頂きました。実直さだけが取り柄の我々を可愛がって頂き、見守って頂き、導いて頂きましたことに心からのお礼と感謝を申し上げます。清衡公のこと、ハスの花の栽培のこと、普皆平等など多くの教えを頂きましたが、大学経営、国際交流などのお話も楽しみでした。また貫首の下で破石晋照氏・南洞法玲氏のラジオ定時番組の企画も始まり、開かれた、身近な中尊寺へのアプローチを感じます。岩手県では六月二十九日を「平泉世界遺産の日」と定めて平泉文化遺産を大切に守っていくことを誓っています。

山田前貫首には、岩手県知事より令和二年度県勢功労者表彰が授与され岩手県に対する大きな貢献が認められたことは我々にとって大変嬉しいニュースでした。また、北上川ＲＣＡは平成二十四（二〇一二）年六月二十六日、（公）日本河川協会、平成二十四年度日本水大賞・表彰式において、「市民による北上川・ナイル川姉妹河川協定の締結と平泉世界文化遺産登録の支援」の活動に対して第十四回・日本水大賞（審査員特別賞）が与えられています。

山田俊和前中尊寺貫首の生前のご教示に厚くお礼を申し上げ、ご冥福を心よりお祈りいたします。

中尊寺関係活動年表

平成5年11月	建設省、北上川遊水地堤防・国道4号平泉バイパス建設ルートを変更。**柳の御所遺跡保存決定**
平成13年4月6日	「平泉文化遺産」**世界遺産暫定リストに登載**
平成15年2月28日	**北上川リバーカルチャーアソシエーション発足**
平成16年10月24日	第1回北上川フォーラム 早稲田大学 吉村作治 教授が基調講演・**千田孝信貫首**がパネルデスカッションに参加
平成17年1月22～31日	第1回エジプト訪問。平山会長・齋藤事務局長外17名が参加
平成18年2月12日	第3回北上川フォーラム 国際日本文化研究センター 川勝平太氏が基調講演・**千田貫首**がパネルデスカッションに参加
平成18年10月1日	中尊寺貫首に**山田俊和氏**が就任
平成18年10月14日	第8回文化セミナーに**佐々木邦世氏**が講話（浄土を考える）
平成18年12月17日	第4回北上川フォーラム 日本ユネスコ連盟会長 松田昌士氏が基調講演・毛越寺 **藤里明久執事長**がパネルデスカッションに参加
平成19年12月17日	第5回北上川フォーラム開催 東京女子医科大学 仁志田博司 教授が基調講演・**山田貫首**がパネルデスカッションに参加
平成20年5月23日	**「平泉文化遺産」、ユネスコ世界遺産の登録延期**
平成20年2月17日	第16回文化セミナーに**菅原光中氏**が講話（供養願文）
平成20年2月17日	第21回文化セミナーに**菅原光中氏**が講話（慈恵大師良源）
平成21年2月15日	第6回北上川フォーラム開催 ワリードマハムードアブデルナーセル エジプト大使と達増拓也岩手県知事が対談

平成21年6月28日	第23回文化セミナーに**山田貫首**が講話（浄土・平和の願い）
平成21年9月6日	第24回文化セミナーに**佐々木邦世氏**が講話（中尊寺ハス）
平成21年12月13日	**一関平泉地域エジプト・ルクソール友好協会が発足 山田貫首 同協会・名誉会長に就任**
平成21年12月13日	第7回北上川フォーラム開催 ワリードマハムードアブデルナーセル エジプト大使が基調講演・**山田貫首**がパネルデスカッションに参加
平成22年2月28日	第27回文化セミナーに**菅原光中氏**が講話（中尊寺ハス）
平成22年4月10～17日	第2回エジプト訪問。**山田貫首・菅原光中氏・佐々木秀圓氏**外が参加
平成22年5月19日	**山田貫首**外、達増岩手県知事にエジプト訪問の結果報告
平成22年11月7日	第30回文化セミナーに**藤里明久氏**が講話（毛越寺）
平成23年7月9日	第31回文化セミナーに**山田貫首**が講話（世界遺産登録）
平成23年6月29日	**「平泉文化遺産」、ユネスコ世界遺産に正式登録認定**
平成23年7月26日～令和元年7月4日まで10回開催	ウイーン・フィル奏者有志によるレクイエムコンサートの中尊寺白山能舞台で開催
平成23年12月13日	第8回北上川フォーラム開催 元国際連合事務次長 明石 康氏が基調講演・**山田貫首**がパネルデスカッションに参加
平成25年12月14日	第40回文化セミナーに**菅原光中氏**が講話（エジプトハス）
平成26年1月25日	第9回北上川フォーラム開催 静岡県 川勝平太知事が基調講演・**山田貫首**がパネルデスカッションに参加
平成26年2月26日	第10回北上川フォーラム開催 元文化庁長官 近藤誠一氏が講演・**山田貫首**がパネルデスカッションに参加

平成26年12月10～17日	第3回エジプト訪問。**山田貫首**、**佐々木秀圓氏**外6名が参加
平成27年1月31日	第44回文化セミナーに**山田貫首外が報告**（エジプト訪問）
平成27年～平成30年の蓮の開花期	月見坂下広場に中尊寺蓮とエジプト蓮を展示
平成29年8月27日	第48回文化セミナーに**藤里明久貫主**が講話（毛越寺貫主）
平成30年12月2日	**山田貫首**と共に「藤原氏終焉の地（秋田県大館市）」を訪問
令和元年7月27日	第50回文化セミナーに**破石晋照氏・南洞法玲氏**対談（浄土発信）
令和元年9月8日	**山田貫首**と共に藤原氏終焉の地（秋田県大館市）を訪問
令和2年4月24日	中尊寺 **山田俊和貫首** 退任、後任に**奥山元照氏**が就任
令和2年5月15日	前貫首 **山田俊和氏**が令和2年度岩手県県勢功労者表彰を受賞
令和2年7月15日	前貫首 **山田俊和氏**が北上川リバーカルチャーアソシエーション名誉会長
令和7年3月4日	中尊寺元貫首 **山田俊和氏** 遷化。83歳

ひらやま　けんいち
岩手大学名誉教授

大長寿院前住職
菅原光中さんを偲んで

五十嵐　正　一

令和七年七月十一日　前大長寿院住職を務められました菅原光中さんが遷化されました。心から、謹んでお悔みを申し上げますとともに、私達の地域づくりに対しまして多大なご協力を賜りましたことに、衷心より感謝申し上げるものであります。

本寺地区地域づくり推進協議会は、平成十六年三月に本寺地区に住んでいる地域住民全戸が加入し、骨寺村荘園遺跡の景観保全や活用に加え、世界文化遺産登録に向けた取り組みや農業の生産性・効率性を高める等「活力ある地域づくり」を進めることを目的に設立いたしました。

このためには、世界文化遺産登録候補地となっている「骨寺村荘園遺跡」の歴史や中尊寺との繋がりをより多くの方々に知って頂くことが重要とのことから、平成十九年二月に「骨寺村を語る会」を開催いたしました。

この「語る会」には、当時の一関市文化財調査員の小野寺啓さんより、「伝説の骨寺」と題し独自の意見を交え骨寺の遺跡の解説をいただきました。さらに、当時の大長寿院のご住職でありました菅原光中さんと現在の大長寿院のご住職であります菅原光聴さんのお二人から、〝骨寺村が信仰の地〟であったこと、中尊寺を経済的に支援していた重要な地域であったことなど、骨寺村と中尊寺との深い関わりについてお話を頂きました。

本寺地区には、仙台藩が作成した「安永風土記」「封内風土記」などにも記されていることや、古老からの言い伝えとして、昔、中尊寺は本寺にあったという話があります。私自身も中学生時代に先輩からそのような話を聞き、自転車で中尊寺まで出向き、本寺と中尊寺との係わりについて様々な夢を抱いたことを覚えています。

この「骨寺村を語る会」は、自分たちの住んでいる本寺の素晴らしい歴史や価値についてもっと理解を深めた

いとの学習意欲や、中世から続く地域の景観を保全することの重要性、更には、中尊寺さんとの交流の必要性を改めて確認する会となりました。

この「語る会」の開催により中尊寺との交流や絆が深まりました。

この年の春には、中世時代から耕作されていると言われている「小区画水田」での種まきに菅原光中さん光聴さんのお二人にお出で頂き「種まき豊作祈願」をおこなっていただきました。まさに、平成十九年は九〇〇年の時を経て、中尊寺と骨寺村の繋がりが復活した年となったと言えるのです（あれからまもなく二十年）。

この時に、光中さんから、大長寿院と本寺との繋がりについて、お話がありました。

光中さんのお話によりますと、戦後の昭和二十九年頃まで、本寺の下真坂にある「慈恵大師拝殿」に護摩焚きに来ていたとのことでありました。護摩焚きは、当時の大長寿院のご住職（光中さんのお父さん）が行ったものと思いますが、幼少時代の思い出としての記憶は、光中さんにとって、ご先祖様である自在房蓮光さんの私領であった本寺は、特別な地だったのかもしれません。

中尊寺と本寺との交流の復活は、光中さんにとって長年の課題であり、感慨深いものがあったのでしょう。

そして、この年から田植え体験交流会・稲刈り体験交流会にも光中さん光聴さんお二方にお出で頂き、豊作祈願・安全祈願のご祈祷を行って頂きました。更に公事に習い、中尊寺への米を納める「中尊寺米納め」を行うこととなりました。

春の稲の種まきがキッカケとなり、田植え・稲刈り・米納めなどの開催につながり、「骨寺村荘園遺跡」を全国に発信することとなったのです。まさに、菅原光中さんのお力添えとご協力の賜であります。本当にありがとうございました。感謝の気持ちで一杯です。

光中さん覚えていますよね？　初めての米納めを終えた後の「直会（なおらい）」。

会場は大長寿院でしたね。沢山の本寺の住民が、お寺にお邪魔しました。そして、杯を酌み交わしましたね。あまりに沢山の人達が参加し、足の踏み場もないほどでした。この時の雰囲気がよほど良かったのでしょう。次

稲刈り

米納め

米納め

米納め

の年の米納めにも沢山の方に参加して頂きました。故山田貫首様にも飛び入り参加して頂きました。山田貫首様は、持参した地酒が大変気に入られました。「是非、どぶろく特区をとりなさいよ」と激励されたことも、良い思い出です。

今年は、平泉中尊寺の落慶から九〇〇年の節目の年です。光中さんも楽しみにしていたものと思います。光中さんと同年代の本寺の地域づくりにがんばった先輩達も、今は、西方浄土の世界に旅立っています。どうか光中さん、須川岳のはるか彼方にあるという西方浄土の世界から本寺の人達とお酒を酌み交わしながら、今後の取り組みにお力沿えを賜りますようお願いするものであります。

改めまして、これまでのご支援、ご協力に感謝を申し上げます。

いがらし　しょういち
本寺地区地域づくり推進協議会会長

〔関山句嚢〕

〈第六十四回　平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉
（令和七年六月二十九日　於中尊寺）

（當日句入選）

朱印帳閉じては開く日傘かな　（大会長賞）
＊白濱一羊選　特選　平泉町　佐々木邦世

平泉の日蠟涙（ろうるい）の乾かざる　（中尊寺貫首賞）
特選　奥州市　郡司　山吹

一匹の蟻と参らん光堂　（毛越寺貫主賞）
特選　盛岡市　村井　康典

心音は木魚と溶けて夏座敷
秀逸　一関市　鈴木　叔

縞蛇のじっと動かぬ千年杉
秀逸　奥州市　佐藤　靖子

平泉の日梵（ぼん）の一字の朱印帳
秀逸　北上市　伊藤　順子

夏足袋をきりりと導師こゑ朗と
秀逸　平泉町　岩渕　洋子

夏帽子小脇にはさみ光堂
秀逸　一関市　菅原　節香

炎天を吸ふ関山の杉木立　（岩手県知事賞）
＊小林輝子選　特選　盛岡市　相馬　定子

万緑の統ぶるみちのく浄土かな　（河北新報社賞）
特選　一関市　三浦　寿子

艶を消し緑蔭に在り能舞台　（岩手日報社賞）
特選　奥州市　沼倉　規子

旅人の句碑やさらさら竹落葉
秀逸　奥州市　大石　文雄

義経堂供華となりたる都草
秀逸　宮城県　横山　洋

皮つけしままに伸びゆく今年竹
秀逸　奥州市　古川　和子

卵塊を紡ぎ千年枝蛙
秀逸　一関市　村上　一誠

万緑や北参道の細き道
秀逸　北上市　大嶋　裕子

万緑の統ぶるみちのく浄土かな　（岩手県議会議長賞）
＊渡辺誠一郎選　特選　一関市　三浦　寿子

朱印帳閉じては開く日傘かな　（岩手日報社賞）
特選　平泉町　佐々木邦世

蛮夷なる声遥かなり蝦蟇（ひきがえる）　（中尊寺賞）
特選　一関市　砂金　眠人

万緑を傘に黙座の西行碑
秀逸　一関市　伊藤　英伸

苔の花鑿（のみ）跡古ぶ楸邨碑
秀逸　一関市　沖田　誠子

金鶏山の水で育てしあやめ草
秀逸　登米市　藤野　尚之

ほととぎすあやめ浄土を渡りゆく
秀逸　盛岡市　永井　雍子

炎天を吸ふ関山の杉木立
秀逸　盛岡市　相馬　定子

蛮夷なる声遥かなり蝦蟇（ひきがえる）　（平泉町教育長賞）
＊照井　翠選　特選　一関市　砂金　眠人

供華として咲き継ぐ未来古代蓮　（岩手日日新聞社賞）
特選　奥州市　阿部　靖

苔の花鑿跡古ぶ楸邨碑　（毛越寺賞）
特選　一関市　沖田　誠子

花菖蒲写経の背は孤独なり
秀逸　一関市　高橋　幸子

朱印帳閉じては開く日傘かな
秀逸　平泉町　佐々木邦世

二十の目描かれて幟旗涼し
秀逸　花巻市　川村　健

卵塊を紡ぎ千年枝蛙
秀逸　一関市　村上　一誠

炎天を吸ふ関山の杉木立
秀逸　盛岡市　相馬　定子

中尊寺仏の下に蟻地獄　（平泉町議会議長賞）
＊澤口航悠選　特選　盛岡市　齋藤　雅博

鞘堂の梅雨の敷居を跨ぎけり　（岩手日報社賞）
特選　盛岡市　和田　タケ

夏帽子小脇にはさみ光堂　（岩手日日新聞社賞）
特選　一関市　菅原　節香

旅人の句碑やさらさら竹落葉
秀逸　奥州市　大石　文雄

青田風受けて八十路の月見坂
秀逸　北上市　鉄本　正人

下闇に犬一匹の休み所
秀逸　一関市　石川　惠子

参道の札所の明かり青葉風
秀逸　奥州市　小野寺敦子

梅雨晴間古刹の庭に梅落ちて
秀逸　奥州市　伊藤さとる

鞘堂の梅雨の敷居を跨ぎけり　（平泉観光協会長賞）
＊二階堂光江選　特選　盛岡市　和田　タケ

堂涼しシルクロードの夜光貝　（河北新報社賞）
特選　気仙沼市　熊谷　房子

日の中を旅の途中の芽の輪かな　（岩手日日新聞社賞）
特選　盛岡市　工藤　好子

苔の花鑿跡古ぶ楸邨碑
秀逸　一関市　沖田　誠子

関山へ階（はし）たつごとし梅雨の蝶
秀逸　奥州市　服部　常子

四代の栄枯ひと日の沙羅の花
秀逸　盛岡市　兼平　玲子

吾（われ）も亦（また）過客（かく）や炎ゆる平泉
秀逸　盛岡市　伊藤　恵美

炎天を吸ふ関山の杉木立
秀逸　盛岡市　相馬　定子

（応募句入選）　（投句総数　九五三句）

＊白濱一羊選

天　新聞に撃の字多し五月憂し
一関市　伊藤　優子

地　「オペラ座の怪人」隣席の香水
盛岡市　伊藤　恵美

人　平泉の日手の甲へ書くバス時刻
栗東市　蜘蛛（くもの）野澄香（すみか）

＊小林輝子選

天　囀やひかり堂出て皆無口
奥州市　阿部　靖（やすし）

地　お借りする楸邨（しゅうそん）句碑の片かげり
奥州市　郡司　山吹（やまぶき）

人　角取れし古刹の礎石すみれ濃し
盛岡市　村井　好子（よしこ）

＊渡辺誠一郎選

天　避難所の次も避難所花の冷え
奥州市　郡司　山吹（やまぶき）

地　晩酌や時にだんまりばつけ味噌
横手市　森屋　慶基（よしもと）

人　痛かりし父のバリカン昭和の日
多賀城市　昆　征衛（ゆきえ）

＊照井　翠選

天　浄土へと朧をぬけし春の月
秋田市　最上　悦

地　夏草に沈みて朽つる漁舟（いさりぶね）
高松市　岡田　貞幹（ていかん）

人　磯菜摘む波の呼吸を計りつつ
釜石市　紺野きぬえ

＊澤口航悠選

天　カーナビの道なりといふ花あかり
　　気仙沼市　熊谷　房子（ふさこ）

地　屋根替へや棟に明治の神の札
　　奥州市　及川　忠子

人　遠足や教師の胸に銀の笛
　　奥州市　小野寺敦子

＊二階堂光江選

天　母許の平泉の日手に虎屋
　　江東区　石井真由美

地　高館の藪の騒ぎへ草矢打つ
　　大崎市　木村　一枝（かずえ）

人　囀りのこぼるるばかり覆堂
　　大崎市　鈴木　勝也

岩手県内　小・中学校の部　（投句総数　七六八句）

岩手県内小学校

特　選（三句）　＊……ユネスコ協会長賞

＊　秘境駅かえらぬ友と蝉の声
　　岩手町川口小学校　六年　浦田　海翔

通学路つくしぽこぽこきれいだな
　　一関市萩荘小学校　六年　佐藤　舞織

山道が一面さくらのカーペット
　　一関市萩荘小学校　六年　佐藤　莉菜

岩手県内中学校

特　選（三句）

＊　悔しさに追い打ちかける夏の雨
　　宮古市新里中学校　一年　古舘　玲弥

ラムネ瓶その先に見る君の顔
　　宮古市新里中学校　一年　関口　希歩

もう一歩白球を追う炎天下
　　宮古市新里中学校　一年　田鎖　功晟

平泉小学校

特　選（三句）

＊　プールでは宇宙みたいで最高だ
　　四年　千葉　桃花

こいのぼり空に向かって飛び立つよ
　　五年　佐々木雄彪

ヒマワリに負けたくないな背の高さ
　　六年　小形　唯

長島小学校

特　選（三句）

＊　ホーホケキョわたしとうぐいすおともだち
　　一年　橋階　色葉

うれしいなきいろいぼうしランドセル
　　一年　岩渕真梨果

かえる鳴く自てん車こいだ田んぼ道
　　三年　三浦　悠花

平泉中学校

特　選

＊　陽春や上着は椅子にかけたまま
　　三年　千葉　成珠

金色の夕日とともに桜舞う
　　二年　星　咲花

第六十五回　平泉芭蕉俳句大会
令和八年六月二十九日（月）
会場　毛越寺
特別選者　石田郷子　先生
（「椋（むく）」創刊・代表）

〔関山歌籠〕

（令和七年四月二十五日）

〈第四十五回　平泉西行祭短歌大会〉

＊穂村　弘選

このままにあと二年ほど生きたしと亡き夫の十日前の言の葉
（中尊寺貫首賞）
埼玉県　飯嶋トモ子

針箱に太き指ぬき鈍色に母の息吹の時こえ伝う
（平泉町長賞）
奥　州　佐藤　建樹

にわさぎさきづねたづねできたったよみがげねけどもなじょしてらべな
（平泉観光協会長賞）
矢　巾　林　もと子

ひとり住む叔母訪ねれば空に舞う白鳥の群れ北へ急ぎぬ
（岩手日報社賞）
盛　岡　鈴木　文子

夕餉どきそばに誰かが居るだけで　それだけでいい　ひとりは寂しい
（ＩＢＣ岩手放送賞）
一　関　佐々木信江

われひとり降ろし立ち去りゆけるバス平泉の町青き田ばかり
（岩手日日新聞社賞）
青森県　中里茉莉子

佳作

横須賀で赤子のわれを風呂に入れ父は最後の別れを告げぬ
一　関　小野寺ヨシ子

音もなく雪のはやさが書き換わるたとえば二、三行の楽譜で
一　関　眞木　環

バレンタイン・チョコは禁止のホームなり嘆き悲しむ母九十八
花　巻　大平　春子

かくれんぼ眼開ければ子らは消え老人だけが犇(ひしめ)いていた
奥　州　小野寺正美

掘り井戸の金気の匂ひなつかしく覗くわが影白髪ゆらぐ
奥　州　菊池トキ子

日が長くなり得をした思ひです　葉書届きぬ令月尽日
北海道　鎌田　博文

しろたへの衣川越え握手せり大谷選手レプリカの手と
宮城県　佐々木栄悦

みちのくのジャングルジムの冷たさよ「サブッ」と言ひつつ孫らは登る
一　関　松村　雅子

第四十六回　平泉西行祭短歌大会
令和八年四月二十四日（金）
会場　中尊寺　光勝院
特別選者　小島ゆかり　先生
（歌人、日本現代詩歌文学館常任理事、放送文化基金評議員）

関山植物誌〈16〉

破石晋照
（金剛院副住職）

エジプトハス

中尊寺のそばには北上川が流れている。古来、この川は文化と富、そして人と人との縁を運んできた。その川辺で白い蓮が開花した。エジプトより贈られた蓮である。朝の光に透ける花弁を眺めながら、私は山田俊和前貫首のお姿を思い起こしていた。

山田前貫首は異国との交流、海外伝道に深い志を抱かれた方であった。一度定められた道については信念をもって突き進まれ、気がつけば人と人、国と国との間に一本の橋が架かっている。そうしたお仕事をなされる方であった。

ある年、中尊寺蓮の淡い桃色と、ナイルに咲く白蓮が並んで咲いた折、前貫首は花を見つめながら「いいもんだなあ」と静かに言われた。その一言には国際交流にかける思いが詰まっていた。

優しさだけの人ではなかった。筋の通らぬことや人の誠意を踏みにじることには容赦されず、厳しさをもって対処された。しかし普段は江戸っ子らしい気風の良さと茶目っ気に満ち、そして何よりも細やかな気遣いの人であった。カバン持ちであった私にも折々に声をかけてくださり、その温かさが嬉しくて、そばを離れることが惜しかった。

また、前貫首には蓮への深い愛があった。御自坊に伺えば、自ら蓮鉢の手入れをされていて、「晋照、蓮は手をかけただけ、大きく咲くんだ」と言いながら、朝露に濡れる花を何度も覗き込んでおられた。その言葉は、多くの困難に向き合いながら人を結び、道を開き、縁を育ててこられた前貫首の人柄そのものであった。

ナイルと北上川という遠く離れた二つの川が蓮によって結ばれたことも、前貫首がまかれた種のひとつであった。川は文明を運び、蓮は縁を運ぶ。今年もまた、残されたエジプト蓮が大きな白い花を咲かせるだろう。

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

令和七年叡山講福聚教会東日本奉詠舞大会に参加して

菅原　園子

二〇二五年九月三十日東日本奉詠舞神奈川大会（横浜）において、詠部の部「地蔵菩薩本願詠歌」で最優秀賞をいただき、六年ぶりに、優勝旗を陸奥教区へ持ち帰ることができました。

四月よりご詠歌の幹事を拝命し、すぐに大会に向けた準備が始まりました。中尊寺支部は、大会に出場するたびに優勝を目指してきた伝統あるチームです。今回は十二名が大会に参加しました。練習も週に二回、加えて定例の法要もしっかりと務め、体力的にも厳しい日々が続きました。猛暑の夏には、毎回アイスを口にしながら、練習を重ねました。佐々木仁秀先生に大会のお稽古をつけていただく機会を得て、ご詠歌の唱え方、とりわけ「地蔵菩薩本願詠歌」は、泥臭く、地面に根を張るような深い低音で、どっしりと唱えるように教えていただきました。その点は、特に意識し大きい声で唱えるように心がけました。又、菅野宏紹先生には所作や全体の動きをご指導いただきお稽古の度に確認することができました。

練習も佳境に入ると、詠舞はお互いの

令和七年叡山講福聚教会東日本奉詠舞神奈川大会

舞をチェックし合いました。最後の練習の日も、扇子の角度に至るまで確認しました。地方（じかた）も、繰り返しお唱えを重ね「もう声が出ない」となるまで、お稽古に向き合いました。詠舞と地方がやれることを最後まで続けて、みんなの熱意と努力が一つになり、そのことがこの度の受賞に結びついたのだと思います。受賞の発表を聞いた瞬間、皆で感激、感動、夢を見ているようでした。全員が笑顔で、ほっとして帰りの新幹線へ飛び乗り、帰路に着いたのは夜遅くでした。

幹事になって気づいたことも、多くありました。中尊寺支部はご詠歌によって結ばれています。年齢もご詠歌歴も異なり、寺庭と地域の会員が一つになって活動しています。中尊寺とご縁をいただき、ご詠歌を通して中尊寺を支えながら、それぞれが日々の生活を送っています。法要の中でご詠歌をお唱えする時間は、日頃の雑念を忘れ仏様と向き合う大切なひとときであることをあらためて実感しました。

今年は中尊寺落慶九百年の年にあたります。この百年に一度の節目の年に、ご詠歌の仲間とともに、中尊寺本堂をご詠歌の音色で響かせるという、歴史的な時間に立ち会えることを光栄に感じております。

これから令和の時代、そしてその先も中尊寺ご詠歌がその時代に寄り添いながら、仏様の教えとともに中尊寺とともに続いていくことを願っています。

今後とも、ご詠歌の活動に変わらずのご協力をお願い申し上げます。又、中尊寺支部に賜っております日頃のご厚情に心よりお礼申し上げます。

（大長寿院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事）

中尊寺支部　新年会にて（令和８年１月）

新刊紹介

（令和七年一月～十二月）

〈報告書〉

『岩手県平泉町文化財調査報告書第１４８集　平泉遺跡群発掘調査報告書』
「倉町遺跡第15次　坂下遺跡第16次　宿遺跡第８次　鈴沢の池跡第４次
毛越寺跡第22次」
編集・発行：平泉町教育委員会　三・二十八

『岩手県平泉町文化財調査報告書第１４９集
名勝　旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅵ　―第15次調査―』
編集・発行：平泉町教育委員会　三・二十八

『岩手県文化財調査報告書第１７０集　平泉遺跡群発掘調査報告書
柳之御所遺跡　―第85次発掘調査概報―』
発行：岩手県教育委員会生涯学習文化財課　三・二十六

『平泉学研究年報　第５号』
発行：世界遺産平泉保存活用推進実行委員会
編集：岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課　三・二十四

『平泉文化研究年報　第25号』
発行：岩手大学平泉文化研究センター・岩手県　三・二十五

『岩手大学平泉文化研究センター年報［第13集］』
編集・発行：国立大学法人岩手大学平泉文化研究センター　三・三十一

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集　骨寺村荘園遺跡確認調査報告書
白山社及び駒形根神社』
発行・編集：一関市教育委員会　三・二十四

『令和6年度　骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』
発行：一関市博物館　三・三十一

『一関市博物館研究報告　第28号』
編集・発行：一関市博物館　三・三十一

思い出と歩み

達谷窟　南　都

私は平成十三年に平泉に生まれ、幼稚園・小学校・中学校と平泉町内の学校に通いました。高校は隣の一関市に通いましたが、高校卒業までの約十八年、ほとんどを平泉で過ごしました。大学卒業後の現在は大学院に進学し、歴史を専攻しております。

歴史を志したきっかけは、よく覚えていません。しかし、奥州藤原氏のことをはじめ、地元の歴史について学ぶ機会が多かったからか、昔を知ることを面白いと感じ、心惹かれる気持ちは常にありました。小学校は毛越寺の目の前に位置しており、中学校もすぐ近くでした。授業の一環で中尊寺や柳御所遺跡、義経堂などを見学する機会も多くありました。歴史に対して苦手意識を全く持たずに今まで過ごしてきたことも、こういう場所に生まれ育った影響であると感じます。小学校・中学校の頃は、授業だからしっかりと参加するという姿勢でした。しかし、自身が生まれ育った場所の歴史を学び、それを誰かに説明できることは非常に重要なことであると今では思います。

私は現在、仙台藩を対象として、近世の修験について研究しています。何故修験をテーマにしているのか、明確な理由を探そうとすると非常に難しいのですが、これについても幼少期の様々な思い出がきっかけになっていると思います。例えば、幼稚園児の頃、風が吹いていないにも関わらず家の近くの竹藪だけが揺れているように見えるのを不思議に思い、家族に尋ねたことがあります。それは、竹藪に天狗が降り立った、あるいは飛び立った証拠だと大真面目な答えが返ってきたので、首を傾げながらも天狗の姿を想像しました。またある時、まだ布団の中で眠っている時間帯に、遠くの方で地鳴りのような、何か非常に大きいものが勢いよく落ちたような「ドシン！」という音が聞こえて起きてしまったことがあります。大人に話して確かめてもらっても、何も落ちていないのです。あとから家族に聞いたところ、今度は「天狗の岩落とし」と言われました。

天狗が修行の一環で大きな岩を落としているのだとか、村の七不思議だとか、そのような説明をされたと記憶しています。子供騙しの嘘かもしれないと今では思うのですが、天狗に纏わる不思議な話をよく聞いていたためか、『古今著聞集』などの説話集を読んでも、印象に残っていたのは天狗が出てくる話ばかりでした。山を棲家とする天狗と山岳で修行を積む修験者の縁深さを詳しく学ぶようになったのはもっと後になってからですが、幼少期から変わらない天狗への興味が、現在の修験研究への熱意にも繋がっていると思います。

小学校高学年から中学校にかけて、先ほどの『古今著聞集』や『宇治拾遺物語』などの説話集に夢中になっていたこともあり、日本文学を学ぼうと思っていた時期もあったのですが、大学に入り、自分が何に対して興味を持っているのかを改めて考えた結果、歴史を専攻することになりました。近世の修験者については、祈祷を行なったり、札を配ったりするイメージが強かったのですが、色々と学んでいくうちに、非常に複雑な組織のもとに活動していた人々であることを知り、組織や支配面に対して特に関心を寄せるようになりました。今後も一層研究を続けていきたいと思います。

また近頃では、再び平泉と向き合う機会がありました。令和七年一一月末、中尊寺所蔵「平泉諸寺参詣曼荼羅」・「平泉諸寺祭礼曼荼羅」の調査に加えていただいたことで、初めて間近でそれらを見ました。久しぶりに平泉の歴史を伝えるものに接したことは、私の中で大きな出来事でした。曼荼羅に描かれた中には、幼い頃から何度も訪れ、慣れ親しんだ場所もあれば、今ではもう残っていない場所もありました。今まで自分が足を運んだ場所を頭に思い浮かべつつ、緻密に描かれた平泉の信仰世界を間近で観察している

平泉諸寺参詣曼荼羅

と、絵の中の人々と対話しているような不思議な気持ちになりました。

平泉については、奥州藤原氏に関するものをはじめ、既に豊富な研究の蓄積があります。それらの成果を引き継ぎつつ、いずれは自身の研究テーマである修験とも関連させて、近世の平泉の姿を更に解明できればと思っています。

生まれ育った場所の歴史について諸先生方から聞いて学んだ小学校・中学校の頃から一歩進み、自らもひとつひとつ先行研究や史料にあたりながら考え続ける日々を過ごしていますが、昔も今も、与えられた環境や関わってくださる方々に感謝する気持ちに変わりはありません。今後もその気持ちを忘れずに精進していきたいと思います。

たがや　なつ
東北大学大学院文学研究科
日本学専攻　日本史研究室　修士2年

平泉から浄法寺へ

菅野宏紹

令和三年の節分が終わった頃、私は突然中尊寺老分職が集まる庫裏応接室に呼び出された。いつもながら勤務態度がよろしくないので、譴責を受けるのかと思っていたが、そうではなかった。この年の五月末で任期満了になる岩手県二戸市浄法寺町天台寺の兼務住職任期満了に伴い後任住職を選定しなければならないとのことで、その候補として私が呼び出された訳であった。

八葉山天台寺といえば、聖武天皇の神亀五（七二八）年、天皇の勅命を受けた僧行基が、八峯八谿（八つの峯と八つの谷）を持つこの山を八葉山と名付けて、山中の桂の大木を刻んで聖観音菩薩を本尊として安置し、天皇直筆の額を掲げて開山したと伝わる東北最古刹である。様々な紆余曲折を経て今日に至っているが、中尊寺貫首であった今東光（春聴）師や人気作家の瀬戸内寂聴師の住職就任が復興への大きな力となっている。私自身は、天台陸奥仏教青年会在籍当時に、天台仏教青年連盟の天台宗開宗一二〇〇年慶讃事業「不滅の法灯全国行脚」で、法灯を奉持して天台寺に伺って瀬戸内寂聴住職（当時）から奉持の労苦を労う言葉を頂き、濁酒をお土産に頂いたご縁があって、当時としては「平泉から随分遠いところに天台のお寺があるのだなあ」くらいの感覚であった。

中尊寺老分が集まる庫裏応接室で、法類総代責任役員の菅原光中師（当時）はじめ関係者から丁寧なる住職就任依頼を受けたのであるが、私には名刹の住職に就任することは大変荷が重い仕事であり、「少し考える時間を頂きたい」と返答して、その場を辞した。

この半年前の令和二年六月に、菅野澄順住職（当時）が心血を注がれその円成を見た「重要文化財天台寺本堂・仁王門保存解体修理」落慶法要のお手伝いに伺ったばかりで、まさか半年後にこの古刹の住職打診を受けるとは考えも及ばぬことであった。

勿論、家族からも反対を受けた。

一ヵ月程で返答すると言った手前、まずは天台寺にいってみようと思い立ち、残寒厳しい二月の雪深い中ではあったが、家族を同伴して高速道を一路二戸市浄法寺町へ向かった。途中、北上江釣子あたりは猛吹雪でホワイトアウト状態、相当怖い思いをしながら天台寺にたどり着いた。決して緩やかではない傾斜の向拝を、八十寿を越えた母親の腰を押して上り本堂を参拝して境内を一巡。確かに往時は北東北仏教文化の中心であったことを想定しうる雰囲気を感じた。中尊寺から住職を選任しているのは大正八年からのようであるが、今のように高速道路も新幹線もない時代に片道約一六〇㎞離れた寺院の住職は相当な苦労があったものと推察できる。

私の場合は、天台寺住職は重責であるので相当悩んだのだが、つくづく考えてみるに、「天台宗祖伝教大師一二〇〇年大遠忌の御祥当の本年（令和三年）に、この打診があったということは、宗祖大師からの誡めでもあろうか」と思い直し、浅学非才を顧みず住職就任を受諾した。

就任早々、名誉住職瀬戸内寂聴師のご遷化があり、不安の中での舵取りだったが関係者の援助によって今日まで何とかお勤めできていることに感謝したい。瀬戸内名誉住職が京都から株分けして境内に植栽したあじさいも、現在四、〇〇〇株を超えた。市の事業として三年後までに一万株にしたいと援助を頂いている。

来る令和十（二〇二八）年は、天台寺開山一三〇〇年の勝縁を迎える。今から記念事業について責任役員・檀信徒総代・二戸市役所・天台寺保存会そして陸奥教区等関係者との打ち合わせに入りたいと考えているところである。

（天台寺住職・当山利生院住）

国指定重要文化財　天台寺本堂

令和七年度 比叡山延暦寺・伊勢神宮　団体参拝報告

清水秀法

令和二年の春、一度は決まっていた団体参拝が新型コロナウイルスの流行によって中止を余儀なくされてから、数年の歳月が流れました。檀信徒の皆様の中には延暦寺参拝が初めてという方も多く、「いつかは本山を参拝したい」との要望をいただいておりました。その計画がこの秋、ようやく形となりました。令和七年十月二十一日から二十三日にかけて行われた比叡山延暦寺・伊勢神宮への団体参拝は、総勢十九名の一行とともに平泉を出発いたしました。

初日の目的地である京都・三十三間堂には、左右の檀に五百体ずつ、百メートル以上にわたって整然と並ぶ千体千手観音立像が安置されています。堂内を埋め尽くす観音様の立ち姿を拝しながら、自坊にお祀りしている千手観音様との御縁を改めて感じる機会となりました。三十三間堂は仏様のお顔が一体ずつ異なり、自分と似た顔の仏様を探すと伝えられています。そのようにして拝観することで、仏様をより身近に感じることができました。その後、大津では琵琶湖の湖面に突き出すように建つ「浮御堂（満月寺）」を訪れました。湖の青さと御堂の姿が調和した景色は、近江八景の一つに数えられるに相応しく、ここでお土産に求めた琵琶湖産の佃煮は、後に皆様から大変喜ばれました。また、琵琶湖が関西の生活水をまかない、周辺自治体からもその維持のための費用が支払われているといった地域の現状についても知る機会となりました。その晩は宿泊先の「雄琴温泉 湯本館」にて懇親会を開催し、地元の食材を活かした料理とともに、和やかな時間を過ごしました。

二日目、一行は総本山・比叡山延暦寺へと向かいました。当日の天気は時折ぱらぱらと小雨が落ちる程度で、傘を差す必要もほとんどありませんでした。しっとりと濡れた霧雨の感触は、修行の地である比叡山の静寂をより際立たせているようでした。阿弥陀堂では、佐々木光澄導師のもと厳かな法要が営まれました。法要の中では御詠歌が捧げられ、静まり返ったお堂に読経と詠歌が響きました。本尊阿弥陀如来の御前で、先亡諸精霊への焼香を捧げ、家内安全と息災延命を祈念いたしました。ようやく本山の地に信徒の皆様をご案内できたことは、私にとりましても感慨深い節目となりました。法要の後、国宝・根本中堂の「平成の大改修」の現場を拝観いたしました。延暦寺の小寺照哉師のご案内のもと、現在は屋根の高さまで組まれた足場から、修理の様子を間近に見学きるようになっています。修復を終えて取り付けを待つ「蟇股（かえるまた）」の彫り物を眼の前に見学できたことはとても貴重な体験でした。また、銅板を葺く前段階の工程である「栩（とち）葺き」についても説明を受けました。厚さ数ミリの板を何重にも重ねて下地を作るこの丁寧な作業が、壮大な屋根の曲線を支えていることに驚かされました。銅板を葺き替える屋根工事や、腐朽した柱の土台を新しい材で補強する「根継ぎ」の技法など、職人による伝統の継承を目の当たりにし、本来の姿が蘇る日が待たれます。

比叡山を後にした一行は伊勢へと向かい、二見ヶ浦にて

根本中堂大改修（蟇股）

比叡山延暦寺参拝記念　令和７年10月22日

夫婦岩を遥拝いたしました。二日目の宿泊先である鳥羽の「戸田家」では、伊勢湾の海の幸を囲み、一日の行程を無事に終えたことを喜び合いました。最終日は、伊勢神宮内宮を参拝いたしました。五十鈴川の清流で身を清め、神域を歩みながら、歴史の重みを感じる、参拝を終えた後は名古屋へと向かいました。現在、名古屋城天守閣は木造復元事業に伴い閉館中でしたが、本丸御殿を見学いたしました。建築・内装ともに豪華な造りで、その美しさに触れ、三日間にわたる全ての行程を終了いたしました。

一度は中止となったこの参拝が、十九名全員の無事をもって結実しましたことは、大きな喜びです。三日間、事故もなく行程を全うできましたのは、参加された皆様のご協力があったからこそと、深く感謝しております。現在、改修が進む根本中堂ですが、修理が完了した際には、その全容を拝しに再び皆様と訪れたいと考えております。この尊いご縁を大切に、また共に参拝できる日を楽しみにしております。

（観音院住職）

本坊表門解体修理
中間報告と勧募御礼

菅野靖純

中尊寺本堂の正面にあり、伊達兵部宗勝邸の旧門を移築したと伝わる「本坊表門」。主要な柱・扉・金具などが江戸初期のまま残っており、岩手県指定有形文化財でもあるこの薬医門は、これまで多くの参拝者の方々を静かに迎えてきました。しかし、平成二十年の岩手・宮城内陸地震、そして平成二十三年の東日本大震災という二度の大きな地震が、この門に深い傷跡を残しました。地震の大きな揺れによって生じた構造の歪みは、年を追うごとに柱や梁へ影響を及ぼし、このままでは次の世代へ安全に引き継ぐことが難しい状態となっていました。先人が守り抜いてきたこの歴史を未来へと繋ぎ、再び安心して門をくぐっていただける姿に戻すため、これまでの修理では行ってこなかった「一度すべてを解体し、組み直す」という決断をしました。

本坊表門　解体前（傾斜）

本坊表門　解体前（金具破損）

令和七年二月に修理が始まってから一年が過ぎようとしている今、これまでの歩みをご報告させていただきます。

今回の修理を進めるにあたって、何よりも私たちの支えとなったのは、全国から寄せられた皆様の温かなお力添えでした。常日頃より当山を支えてくださっている檀信徒や地域の皆様をはじめ、クラウドファンディングを通じてご縁をいただいた全国の皆様、そしてゆかりある寺社仏閣の皆様。寄せられたメッセージの多くに、当山全体を思う温かな言葉が添えられ、目標額である千五百万円を大きく上回る、千八百万円余、約六百名の方々からご浄財をお寄せいただきました。皆様の想いは、現場で作業を続ける職人たちや、私たち一人ひとりの心に深く響き、日々の大きな力となっています。この場をお借りして、改めて心より感謝申し上げます。

令和七年の春から夏にかけて行われた解体作業は、職人たちの手によって、釘跡や穴の一つひとつまで丁寧に記録・確認しながら進められました。慎重に解体が進む中で、妻飾りの一部には当時のものと思われる金箔の跡が確認されました。また、門扉の上部にある八双金物には、外からの侵入者を威圧するような針のように尖った鋲（びょう）が残されていました。今は落ち着いた木の風合いを見せている表門ですが、武家屋敷の門として立っていた当時は、鮮やかに彩られ、威厳に満ちた姿であったのかもしれません。こうした地道な調査から、江戸から昭和に至る各時代の職人が、最善を尽くして門を守ってきた足跡を肌で感じることができました。

取り外された部材は、現在も専門の工房で修復が進んでいます。長年の風雪で傷んだ材や金具は、伝統的な「根継

門扉　八双金物　針のような鋲

本坊表門　妻飾りの金箔跡

本坊表門　根継ぎされた柱

本坊表門　補強された牛曳き梁

ぎ」などの技法を施して古い材を尊重しつつ、必要に応じて現代の補強技術も柔軟に組み合わせることで、目に見えない部分までしっかりと強度を高めています。そして紅葉も終わり雪がちらつき始めた昨年十二月、現場ではいよいよ組み上げの工程が始まりました。一度は更地となった場所に、再び太い柱がクレーンで立ち上がり、骨組みが伸びていく様子は、力強い歩みを感じさせます。これから五月の完成に向け、屋根の美しい曲線が形作られ、震災にも負けないより丈夫な姿となって、再びその姿を現す予定です。

最後になりますが、ご支援いただいた皆様へのリターン品については、現在、山内の木を使用した記念品をはじめ準備を整えております。お手元に届くまでもうしばらくお待ちいただければ幸いです。また、皆様のお名前を記した巻物は、組み立ての最終段階で屋根の最上部である「棟木」の下へと大切に納めさせていただきます。皆様のお名前はこれから数百年もの間、中尊寺の門を見守る存在として、この表門とともに歴史を刻んでいくことになります。

完成までは、まだ細心の注意が必要な工程が続きますが、この大きな責任をしっかりと果たし、完成の日まで誠実に進めてまいります。文化財を直すということは、単に壊れたところを修理するだけでなく、そこに関わる皆様の想いを集め、未来を形にしていくことなのだと、この事業を通じて改めて感じています。早春の柔らかな光が、震災を乗り越えた表門の新しい木肌を照らす日を楽しみに待ちながら、中間報告の結びとさせていただきます。

（管財部次長）

正月に想うこと
「日々是好日」

佐々木　圓　了

世間一般的にアラサーと呼ばれる年齢になり、想うことが多々あります。時の流れは早いもので、歳は二十八、法臈十七年目になりますが、浅学非才の自身を憂う日々にあり、精進の日々でもあります。昭和の時代を知らない自分ですら、もはや中年に片足を踏み入れていることを考えると、焦燥をひとしおに思い知らされます。

中尊寺では子院子弟として数えで十四歳を期に得度受戒を経てから結衆に入ります。結衆とは、二十一ヵ年の下座行を習得する階梯に勤めるグループです。ここに十一月の天台会を起点として中尊寺一山僧侶としてのスタートきることになるわけであります。私が得度を致しましたのは、平成二十三（二〇一一）年ですので、中尊寺が世界文化遺産登録された年と同い年でもあり、東日本大震災が起きた年でもありました。

この結衆の行ですが、盆と正月に都合二回の一定期間中尊寺境内からの外出を控え、開山堂での日課勤行と学寮での寝泊まりをする安居（あんご）が中心です。正直に申し上げますと、大変恥ずかしながらこれが結構堪える内容な訳です。特に正月の修正会期間中です。何故そのように感じるかといいますと、学生の時分の目線で言うならば何をやっているかが分からない、ここに尽きます。

今現在でも全てを理解している訳ではありませんが、正式な天台宗僧侶の資格を得る為に皆受ける総本山比叡山延暦寺行院での加行を修めているのであれば、ある程度は、どこ部分のどういった経文を読んでいるのか、次はこの作法を行わなければならない、そういった観点を持ちながら法要を勤めることができます。

しかし学生の時にはよく分からないけども、皆でやっている部活の強化合宿みたいなもの、そんなイメージでした。最初の方は、般若心経以外のお経が分からないため、盆は正月ほど法要がないのに比べ、日中には修正会、夜には勤行、目の前にはお経という名の漢字の羅列……これらが全

て正座我慢大会のようで辛く感じておりました。

意味も分からず法要や勤行に出ているということは、人によってはあってはならない、無意味だ、と思われる方もいらっしゃると思います。

正月安居中に行われる梵焼供（ぼんじょうく）

題名にもしました「日々是好日」ですが、意味は、良い日でも悪い日でもどんな一日であっても、その一日は二度とやって来ないかけがえのない大事な人生の中の一日である。一時でもおろそかにしてはならない。一生懸命に生きることを心掛ければ、自ずと清々しい一日を送られる。つまりは、毎日が好日である。という中国唐代の雲門文偃禅（うんもんぶんえんぜん）師（じ）の悟りの境地について語った言葉だそうです。

得度してから今日まで様々な法要や勤行に勤めさせて頂きましたが、ベースとなっているのはあの正座我慢大会と思っていた日々が根幹にあると感じています。

ただ正座の我慢であっても、ただお経を聴いているだけであっても門前の小僧習わぬ経を読むではありませんが、それらは必ず日々の精進の糧になると考えています。

正月に想うこと……それは新年から心新たに仏道を歩ませて頂ける、初心を思い出させて頂ける、と想っております。また実践へと移し、この二〇二六年を歩んで参りたいです。

（地蔵院　法嗣）

天台宗ニューヨーク別院　出張報告

佐々木　祐　輔

令和七年六月十三日（金）～六月十八日（水）までの六日間、ニューヨーク州オルバニー天台宗の別院、慈雲山天台寺（ニューヨーク別院）の本堂落慶二十周年慶讃法要並びに得度式に、中尊寺貫首奥山元照師の随行・法要の承仕として参加してきました。

正直、貫首の随行を国内で一度しか経験していない私が、二回目の随行で国外、アメリカに行くとは思ってもいませんでした。海外に一度も行ったことがなくパスポートも持っていませんし、英語も全く話せない状態でしたのでとても不安でした。私よりも先に、随行の経験が豊富な先輩方が行かれるべきではと思いました。しかし、今回は私に声がかかったので、これもご縁だと思い行くことにいたしました。

初日の十三日は、羽田空港に僧侶二十八名、寺庭一名の総勢二十九名が集合し、直行便にてジョンFケネディ国際空港に約十三時間かけて行きました。空港にようやく着いたかと思うと、そこからニューヨーク別院までバスで約三時間かけて移動と聞き、さすがにため息が出ました。

ニューヨーク別院に着くと、私がイメージしていた場所や建物とは違って、どこにお堂があるのだと驚きました。田舎のようなあたり一面緑の、木々に囲まれた大自然の中に朱塗りのキリスト教の教会のような建物（図1）と山門、

図1　本堂

図2　庫裡

大きな白い家（図2）があるイメージです。その教会のような建物が本堂で、元々は馬小屋に使用していた建物を解体し、使える部材を再利用して釘などを使わずに建てられたのだそうです。案内されて中に入ると、そこには天台宗総本山比叡山延暦寺と同じ薬師如来が本尊で、いつも目にする荘厳でした。法要の準備と打合せなどを行いました。

次の日、十四日は始めに得度式（図3）その後に本堂落慶二十周年慶讃法要（図4）が執行されました。得度式では、比叡山延暦寺執行獅子王圓明戒和上のもと男女一名ずつ、二名の得度授戒会が行われました。法要の際に法名や数珠、黒色の衣などを授与されている所を見て、今から十年前に私も緊張しながら中尊寺の本堂で得度式を行っていただいた日を懐かしく感じました。

図3　得度式

図4　本堂落慶二十周年慶讃法要

本堂落慶二十周年慶讃法要では、天台座主猊下御名代として三千院門主小堀光實大僧正大導師、ニューヨーク別院聞真ネエモン住職副導師のもとに厳修されました。法要の間の休憩時間には、群馬教区の僧侶による雅楽の説明や実際に演奏など、会場にいた方々が興味津々で聞いていました。また、法要で般若心経を唱えるところがあり、別院の僧侶のみではなく、会場に参列していた方々が大きな声で唱えている姿に圧倒されました。法要終了後には、記念祝賀会が現地の方々も含め盛大に開催されました（図5）。

図5　記念祝賀会

十五日はバスに乗ってニューヨーク市内を観光。

十六日は各自自由行動でしたので、午前中は貫首とホテル近くの図書館へ行き、午後はニューヨーク別院住職聞真ネエモン夫妻と合流し、杉本博司さんのアトリエへご一緒させていただきました。

十八日に、約十四時間半かけて無事、羽田空港に到着しました。

今回の随行では、十年前の自分自身の得度式を思い返し、改めて僧侶としての原点に立ち返る貴重な時間となりました。ニューヨークの地で新たに得度されたお二人の姿と、それを支える現地の方々の熱意に触れ、国境・言語・文化の壁を越えて、誰の心にも等しく響くものであるのだと実感しました。初めての海外随行で至らぬ点も多々ありましたが、この六日間で得た経験を糧に、これからも務めていきたいと思います。

（積善院　法嗣）

〔陸奥教区宗務所報〕　第二部　中尊寺関係

令和六年十二月一日〜令和七年十一月三十日

□　令和六年

十二月十七日　於 中尊寺
教区選挙管理委員会
委　員　大徳院　佐々木宥司
予備委員　観音院　清水　秀法

□　令和七年

三月十二日　於 天台宗務庁
一隅を照らす運動教区本部事務局長会議
代理出席　金剛院（副）破石　晋照
三月二十五日　於 中尊寺光勝院
陸奥教区教学研修会　山内より十三名参加
三月二十六日〜二十七日　於 天台宗務庁
天台宗中央布教師研修会　瑠璃光院　菅野　康純
四月十五日　於 中尊寺
陸奥教区布教師会　総会・研修会
瑠璃光院　菅野　康純
大長壽院　菅原　光聴
於 花巻市内
六月十七日〜十八日
布教師会東北・北海道地区協議会　総会・研修会
瑠璃光院　菅野　康純
六月二十三日〜二十四日　於 茨城県内
保護司会・民生委員・児童委員・主任児童委員会
合同総会・研修会
大長壽院　菅原　光聴
於 比叡山延暦寺
七月二十六日
総本山駐在布教　瑠璃光院　菅野　康純
七月三十一日〜八月二日　於 比叡山延暦寺
第六十回天台宗青少年比叡山の集い
引率　瑠璃光院（嗣）菅野　靖純
八月四日　於 比叡山延暦寺
比叡山宗教サミット三十八周年「世界平和の祈り」
利生院　菅野　宏紹
金剛院（副）破石　晋照

九月五日　於 前沢ふれあいセンター
一隅を照らす運動陸奥教区本部岩手大会
山内より十名参加
九月六日〜八日　於 大正大学
令和七年度教師研修会A群
地蔵院（嗣）佐々木圓了
十月七日　於 比叡山延暦寺
延暦寺伝法灌頂　開壇伝法
瑠璃光院（嗣）菅野　裕康
十一月十五日〜十七日　於 郡山市内
令和七年度教師研修会C群
地蔵院（嗣）佐々木圓了
十一月二十六日　於 天台宗務庁
天台宗人権啓発公開講座　法泉院　三浦　章興

□　役職任命

（令和七年四月一日）
天台宗典編纂所　電子仏典員
瑠璃光院　菅野　康純

□　経歴法階

（令和七年十月二十三日）
天台会講経論義　二之問勤仕
中尊寺　奥山　元照

□　兼務住職任命

（令和七年六月一日）
天台寺兼務住職　利生院　菅野　宏紹
（令和七年六月十八日）
寶性寺兼務住職　積善院　佐々木仁秀

□　褒賞

（令和七年十月三十一日）
布教功労　円教院　千葉　快俊

□ **教師補任**

（令和七年四月二十一日）

権大僧正　瑠璃光院　菅野　康純
権僧正　千養寺　佐々木秀厚
少僧都　金剛院（副）　破石　晋照

□ **遷化**

（令和七年七月十一日　寂）

大長壽院　前住職　大僧正　菅原　光中

本坊表門解体修理浄財御奉納者　御芳名

赤　石　正　志様
㈱あかみや代表取締役　赤　澤　貴　士様
秋　田様
秋　山　順　子様
㈱アクセラワークス様
㈲あけび橋研究所様
浅　川　　均様
浅　木　紗綾子様
朝　田　茂　子様
朝　田　泰　子様
朝田建設㈱　朝　田　　豪様
蟻　川　ひろみ様
阿　部　容　子様
安　倍　昭　恵様
阿　部　栄　子様
あまた　ゆみこ様
あやしお様
綾　部　修　宏様
荒　井　明　子様
新　井　千　恵様
有　住　朋　子様
有　田　弘　樹様
㈱アルクエイブ様
飯　嶋　潤　一様
五十嵐　公　子様
池　田　晃　子様
石　井　智　代様
石　神　　登様
石　川　晶　子様
石　川　恵　子様
石　川　智　之様
石　﨑　優　子様
㈱衣関屋様
板　場　郁　子様
一関信用金庫様
市　村　ふ　く様
伊　藤　英　伸様
伊　藤　新　一様
いとう　たかし様
伊　藤　ツヨ子様
伊　藤　博　幸様
稲　山　晶　弘様
井　上　　諭様
井　上　周　海様
井　上　雅　祐様
医療法人　弘誠会　阿部医院様
岩　井　一　樹様
いわいの里ガイドの会様
岩　澤　利　哉様
㈲岩手南警備保障代表取締役　佐々木　典　義様
岩　淵　一　彦様

インテリアしらやま様
内田　輝　幸様
生　貫　彦三郎様
江　頭　浩　一様
江川真由美（三宅真由美）様
駅前芭蕉館　千　葉　広　之様
㈱エマナック様
遠　藤　健　司様
遠　藤　東　子様
遠　藤　文　明様
及　川　次　男様
及　川　　学様
及川木工所　及　川　邦　夫様
㈱応　佐　藤　　寧様
大　嶋　寛　隆様
大　杉　洋　子様
太　田　耕　二様
翁知屋　佐々木　優　弥様
大　月　美恵子様
大　友　浩　平様
大　鳥　　佑様
大　西　あすか様
大　橋　すみれ様
大　久　洋　幸様
岡　田　健　吾様
岡　村　公　望様
岡　本　尚　志様・美　喜様
おがわ　のりこ様
小　川　みどり様
小　川　祐　哉様
荻　山　郁　子様
㈱オクイ様
奥　山　　隆様
男山酒店様
長　田　篤　忠様
小野寺　和　隆様
小野寺　君　吉様
小野寺　　公様
小野寺　康　二様
小野寺　豊　一様
小野寺　　宏様
小野寺　マツ子様
小野八幡神社　権禰宜・涼恵様
小　原　恵美子様
折　笠　　凪様
甲　斐　壮　一様
葛　西　俊　明様
葛西クリーニング　葛西　　博様
笠　倉　　綾様
梶　間　晃　道様
加　藤　美　奈様
加　藤　良　泰様
加藤　良大（平泉商工会事務局長）様
門　田　潤　子様
金蛇水神社様
金　田　晶　佑様
かねまる　ひろあつ様

cafe&bar 琥珀様
㈱大林組　東北支店様
㈱斎藤松月堂様
加　部　一　彦様
鎌　田　真由美様
山　平　省　一様
亀　井　とし子様
烏　山　怜　也様
川　阪　繁　美様
川　島　　桜様
川　島　康　子様
川嶋印刷㈱様
川　邉　　仁様
菅　野　彊　様
菊　池　　晃様
菊　地　永久子様
菊　地　恵　子様
岸　本　　幸様
北　中　博　子様
きた　まゆみ様
木　下　桃　子様
黒　川　優　子様
黒　沢　明　彦様
景谷山大聖院様
㈱慶和　夢の会様
k-shim 様
小　出　重　雄様
小岩金網㈱様
㈲小岩材木店様
児　玉　勇　一様
小　戸　純　平様
後　藤　敦子　様
後　藤　栄　一様
（一社）古都ひらいずみガイドの会様
小　西　晫　也様
小　林　秀　幸様
小　林　紘　子様
小　林　幸　雄様
小松　拓威様　小松家　木村家様
小　森　愛　美様
五郎沼薬師神社様
コンカツ印刷㈲
代表取締役　菅　原　　隆様
近　藤　尚　子様
今　野　弘　昭様
最勝寺様
齋　藤　糸　子様
齋　藤　和　美様
齋　藤　重　樹様
斎　藤　昇　一様
齊　藤　貴　大様
斉　藤　福次郎様
西福寺様
西福寺　世話人一同様
酒田三十六人衆様
櫻　井　　徹様
櫻　井　友　梓様
櫻　井　リ　ン様

桜庭祥央様
佐々木慶子様
佐々木宗生様
佐々木孝夫様
佐々木多門様
佐々木誠様
佐々木美由紀様
佐々木有希子様
佐々木梨沙様
㈱佐々木組
代表取締役社長 佐々木一徳様
佐藤敬二様
佐藤沙織様
佐藤修子様
佐藤弘花様
佐藤幸博様
佐藤みゆき様
佐藤由美子様
里見尚一様
佐和祐梨子様

㈱三衡設計舎
代表取締役社長 勝部敬次様
三千院門跡様
塩見博様
自性院様
地福寺様
司法書士あい総合事務所様
嶋田努様
島田登仁様
島田美香様
清水誠様
下山美佐子様
蕭嘉妤様
㈱浄土の郷平泉様
白出瑛明様
白金運輸㈱様
須貝公一様
菅藤誠様
㈲すがゆう生花店様
菅原勇雄様

菅原悦朗様
菅原清人様
菅原光中様
菅原俊美様
菅原正義様
菅原幹成様
村杉誠実様
助川治様
鈴木完幸様
鈴木紀子様
鈴木四郎様
鈴木友子様
鈴木のり子様
鈴木浩之様
鈴木まゆみ様
鈴木由紀子様
鈴木玲香様
砂沢直也様
住吉忠男様

㈱精茶百年本舗
代表取締役 清水恒輝様
西来寺寺井良宣様
関口一雄様
堰端久美子様
妹尾優輝様
妹尾家 木戸岡家様
㈲泉橋庵
代表取締役 高橋千恵様
大學洋明様
大成建設㈱様
大福寺轟堯順様
台灣 謝侑恩（HSIEHYUEN）様
たか様
高野美智子様
髙橋国博様
高橋珠翠様
高橋智恵子様
高橋正次様
髙安智様
瀧澤トミエ様

竹河志郎様
武田悦恵様
武山勝男様
忠田基博様・美樹様
達谷西光寺様
達範様
立澤裕介様
田中煌子様
田中亜紀子様
田中崇嗣様
田中百子様
田中譲様
谷良男様
玉井邦治様
田村洋子様
出張寛子様
出張佑子様
千田良憲様
千葉勝子様

千葉カツ子様
千葉秀一郎様
千葉俊一様
千葉庄悦様
千葉武裕様
千葉智子様
千葉信夫様
千葉春香様
千葉広之様
千葉弘幸様
千葉雄治様
千葉湧斗様
千葉内科医院 千葉万美子様
茶谷和夫様
中尊寺簡易郵便局様
中尊寺節分会講中様
長徳寺 江田昌弘様
陳世興様
塚本弘一様

津軽石さんさ踊り保存会様
辻田芳宏様
辻本雅巳様・育子様
diffi様
天台寺様
天台宗神奈川教区　天王院様
㈲銅盛鈑金工業　鈴木繁夫様
冨樫陽太様
戸倉克則様
富山貴行様
鳥畑正彦様
内藤和雄様
永津貴大様
長﨑澄恵様
中﨑尉浩様
中沢克之様
永田さとし様
なかだま　弓様
長野伊津子様
中野千里様
中村紗彩様
中村潤子様
中村美智子様
中村木綿子様
名倉理恵子様
西田義人様
西野仁様
新渡戸孝乗様
新渡戸翔太様
新渡戸常英様
新渡戸禮子様
新渡戸記念館様
㈱日本観光アセットマネジメント様
根来尋巳様
根本淳様
野呂美帆様
羽澤昌子様
橋口仁美様
㈲芭蕉館様
長谷川将大様
長谷川博子様
服部彰子様
花井千美様
花巻温泉㈱様
馬場喜一郎様
馬場ちーちゃん、らぐたん様
原田様
原田明宏様
東恵美・宏一郎様
東喜則様
ぴよ様
（一社）平泉観光協会様
㈱平泉観光レストセンター様
平泉喜桜会様
平泉総社神輿会　齋藤清壽様
㈲平泉電友社様
㈱平泉ホテル　武蔵坊様

平田公仁様
深澤武治様
布川隆男様
福岡市　満田秋彦様
福山慶明様
藤﨑富美江様
藤島敬子様
藤田月水様
藤原憲幸様
藤原由貴様
船岡優太様
ふみこ様
ふるさと平泉会様
ふるさと平泉会　会長　浅利日和様
弁慶松様
弁慶松様
㈲豊隆軌道様
pokaとrin様
細川貴史様
堀裕様
本所石勝㈱様
本多薫様
本間重亘様
前田満子様
益満様
松本数馬様
松本一様
松本博美様
満福寺様
三浦輝子様
三浦康幸様
三上正様
溝淵寛雅様
みちのくコカ・コーラボトリング㈱　代表取締役社長　谷村広和様
南野浩一様
峯熊雄康幸様
みほとけの寺子屋様
宮島信介様
宮村信子様
妙行寺　新渡戸智純様
命徳寺　多田孝元様
村上政彦様
室野秀文様
望月玲子様
森晶子様
森龍彦様
森智恵子様
森川光善様
森山英美様
八重樫忠郎様
矢崎知子・桂子様
矢田一穂様
箭内克俊様
山口洋子様
山﨑賢人様
山﨑陽一様
山田眞由美様

山田　雪様
ゆかぴょん様
Yoko 様
古川　泰　也様
吉澤　史　圃様
吉田　琴　子様
吉田　秀　信様
吉野　綾　子様
来田　洋様
利江子様
りく様
ルミネはたの眼科様
レイレナ様
和牛ひろし様
渡邉　久　美様
渡辺　昭　二様
渡邉　誉　也様
渡辺　展　亨様
渡部　正　勝様

亘　理　佳代子様
和山　文　香様

御奉納者　御芳名

令和七年十一月十三日　　鈴木友子様

一、黄瀬戸輪花皿　飛井隆司　作　一点
一、備前花入　小川月泉　作　一点
一、油滴天目茶碗　広瀬宝秀　作　一点
一、透し方円籠　岩尾豊南　作　一点

浄財御奉納者　御芳名

令和六年十二月～令和七年十一月

一関信用金庫平泉支店　三万円
天台寺様　三万円
天台こよみ刊行会様　五万円
千葉幸八様　四万七千円
㈲平泉観光写真社　代表取締役　髙橋拓生様　三万円
立正佼成会花巻教会　三万円
大聖院様　十六万円
命徳寺様　十六万円
みちのくコカ・コーラボトリング㈱
代表取締役社長　谷村広和様　十万円
念法眞教　総本山金剛寺様　五万円
千葉正佳様　五万円
エイ・アイ・ユニバース合同会社
代表　車戸邦茂様　二十五万円
真福寺様　三万円
平泉町観光ガイド事務所様　十万円
深大寺様　二十万円
瑞巌寺様　三万円
立石寺様　三万円

富貴寺様　四万円
常住寺様　十万円
平泉水かけ神輿三十周年を祝う会様　五万円
最勝寺様　三十万円
無極清玄妙佛聖道院様　三万円
岩手教区教務所様　五万円
㈱不識庵様　三万三千円
長福寺様　三万円
天台陸奥教区仏教青年会様　三万円
天台宗神奈川教区様　十万円
茶道裏千家　淡交会岩手南支部様　二十万円
㈲千葉恵製菓　代表取締役　千葉正利様　十万円
（順不同）

浄財募金

令和六年能登半島地震災害義援金　一、九二二、四一八円
令和六年能登半島地震災害義援金　七〇四、八九四円
令和七年大船渡市大規模林野火災　一、一二四、九三九円
令和七年大船渡市大規模林野火災　二三三、三一四円
二〇二五年ミャンマー地震救援金　一、四八四、五八七円

不動尊篤信御奉納者　御芳名

令和六年十二月～令和七年十一月

青森市　佐々木幸子　十六万二千円
平泉町　川嶋印刷㈱ 代表取締役社長　菊地慶高様　十三万円
中野区　中村武司様　十一万五千円
大仙市　㈲ベル美容室　高橋紀美世様　十万円
愛知県知立市　匿名希望様　十万円
秋田市　木村英夫様　七万二千円
奥州市　㈱板宮建設（本社）様　六万円
一関市　㈲豊隆軌道　会長　千葉幸八様　五万五千円
平泉町　㈱北都高速運輸倉庫東北 小野寺勝彦様　五万円
一関市　大和建工㈱　千葉哲也様　五万円
奥州市　佐々木誠様　四万八千円
栗原市　澤邉幸隆様　四万円
千葉市　渡邉良弘様　四万円
一関市　佐藤貴理様　四万円
真岡市　㈱丸茂　賀川茂樹様　四万円
平泉町　㈱フタバ平泉　広野輝幸様　四万円
千葉市　井上陽平様　四万円
平泉町　一関信用金庫　平泉支店様　三万円
一関市　山平様　三万円
一関市　橋本晋栄様　三万円
奥州市　岩渕　進様　三万円
一関市　割烹炉ばた一八　渋谷正幸様　三万円
本吉郡　山口　昇様　三万円
仙台市　㈱橋場総設　泉　笑子様　三万円
一関市　㈱精茶百年本舗様　三万円
北秋田市　清水　智様　三万円
奥州市　千葉幸雄様　四万円
塩釜市　庄内千恵様　三万円
仙台市　齋藤　哲様　三万円
秋田市　㈱八永南部家敷　葛巻孝一郎様　三万円
一関市　㈲豊隆軌道　千葉美樹様　三万円
一関市　東北建工企業㈱　今野幸宏様　三万円
盛岡市　白峰水蓮様　三万円
栗原市　千葉　健様　三万円
仙台市　㈱Our Voice　杉山吉俊様　三万円
一関市　㈱東北鉄興社　伊賀康治様　三万円

青森県三戸郡黒石市	㈲工銀青果　工藤一男様	毎季御供物
平川市	池田陸奥男様	毎季御供物
二戸市	長尾智子様	毎季御供物
小樽市	㈲岩食商事　米沢　修様	毎季御供物
大館市	村口初男様	毎季御供物
弘前市	北秋生コン㈱　加賀谷正子様	毎季御供物
平泉町	鎌田照美様	毎季御供物
奥州市	岩間直幸様	毎季御供物
盛岡市	岩渕　進様	毎季御供物
金ケ崎町	蟻川ひろみ様	毎季御供物
奥州市	高橋勘太郎様	毎季御供物
大崎市	佐々木　誠様	毎季御供物
平泉町	若見正幸様	毎季御供物
平泉町	小岩材木店　小岩義典様	毎季御供物
大仙市	鈴木榮子様	毎季御供物
平泉町	㈲ベル美容室　髙橋紀美世様	季毎御供物
一関市	㈲平泉観光与真社　高橋拓生様	毎季御供物
高崎市	㈱精茶百年本舗様	衡年茶
	大門屋物産㈱様	金色ダルマ

（順不同）

執務日誌抄

令和六年十二月一日～令和七年十一月三十日

令和六年

◇十二月

三　日　月次（つきなみ）大般若（本堂）

六　日　経蔵色彩調査

初詣警備会議（管財　於役場）

七　日　薬師会（讃衡蔵）

八　日　川西大念佛剣舞重要無形民俗文化財国指定三十周年・ユネスコ無形文化遺産登録記念行事開催（円乗院　於衣里地区センター）

十四日　弥陀会（讃衡蔵）

十五日　骨寺村荘園米奉納

お経を読む会（常住院）

十七日　白山会（本堂）

中尊寺節分講中総会（執事長・法務　於泉橋庵）

十八日　平泉観光協会理事会（執事長）

二十日　平泉文化観光振興基金運営委員会（執事長　於役場）

二十四日　文殊会（経蔵）

二十八日　恒例御供餅つき

三十一日　午後三時　**一山総礼**

令和七年

◇一月

一　日　零時　**新年祈祷護摩供修行**

七時半　東山町〈若水送り〉着

九時　正月祈祷護摩（本堂）

十時半　総礼

修正会　釈迦供（本堂）

二　日　九時　正月祈祷護摩（本堂）

修正会　薬師供（峯薬師　讃衡蔵）

午後三時　謡初め（庫裡広間）

三　日　九時　正月祈祷護摩（本堂）

修正会　山王供（山王堂）

十一時半　元三会　慈恵供（本堂）

四　日　修正会　薬師供（瑠璃光院薬師堂）

五　日　修正会　文殊供（経蔵）

大般若会（利生院弁財天堂）

寒修行（行者三名、町内托鉢。～節分）

六　日　修正会　釈迦供・月山御法楽（釈迦堂）

七　日　修正会　白山十一面供（本堂）

大般若会（本堂）

修正会　弥陀供（金色堂）

役席　春の能番組を諮る

八　日　修正会　薬師供（讃衡蔵）

一字金輪仏・千手観音法楽

修正会結願

金盃披き（光勝院）

十二日　令和七年度平泉町成人式（執事長　於エピカ）

十四日　**慈覚会**（御影供　本堂）

お経を読む会（貫首）

如帝珠院勧学大僧正厚隆大和尚三十三回忌法要（光勝院）
十五日　福聚教会中尊寺支部交流会（貫首　於武蔵坊）
十七日　讃衡蔵運営委員会
二十二日　平泉商工会会員新年交流会（執事長　於武蔵坊）
二十四日　念法眞教総長様来山（執事長挨拶）
二十六日　**文化財防火訓練**
三十一日　平泉観光協会理事会（執事長）

◇二月

一　日　月次大般若（本堂）
二　日　恒例**大節分会**（北の若関・歳男歳女・町内園児）
九　日　元平泉町消防団分団長千葉泰孝氏瑞宝単光章叙勲受章祝賀会（管財澄円　於平泉レストハウス）
十　日　中尊寺表門工事着工安全祈願法要（導師：真珠院　式衆：管財法務）
十四日　涅槃会御逮夜（本堂）
十五日　**涅槃会**（本堂）
　　お経を読む会（真珠ノ澄円）
十八日　平泉観光協会理事会（執事長）
　　平泉町上下水道運営協議会（管財　於エピカ）
十九日　岩銀友の会新春講演会（総務晋照　於ホテル松の薫一関）
二十一日　平泉観光協会通常総会（参拝晋照代理出席　於商工会館）
二十七日　経蔵色彩調査（管財澄円　於東京）
　　平泉町世界遺産推進基金運営委員会（執事長　於平泉文化遺産センター）
　　貫首講話（仏教講座　於埼玉県会場）
二十八日　真言宗豊山派川城（藤森）孝道師来山

◇三月

一　日　月次大般若（本堂）
二　日　前中尊寺貫首山田俊和望擬講大僧正御遷化
三　日　平泉町文化観光振興基金運営委員会（総務五大代理出席於役場）
五　日　鴻巣市仏教会並びに鴻巣地区仏教研究会様来山
六　日　山田俊和前貫首回向法要
七　日　中尊寺菊まつり協賛会役員会（光勝院）
十　日　山田俊和前貫首通夜（貫首・執事長他　於最勝寺）
十一日　**山田俊和前貫首本葬**（貫首・執事長他　於最勝寺）
　　東日本大震災物故者追善回向祥月命日法要（本堂）
十四日　浦井正明輪王寺門主・寛永寺貫首密葬（貫首・随行祐輔於寛永寺輪王殿）
十七日　世界遺産登録十五周年記念事業実行委員会委員就任依頼並びに設立総会（執事長於役場）

十九日　**基衡公御月忌**（胎曼供　本堂）
　　お経を読む会（瑠璃光院）
二十日　春彼岸会法要（法華三昧　本堂）
二十三日　源義経公東下り行列保存会定期総会（総務五大　於滝沢魚店）
二十四日　開山会（護摩供　開山堂）
　　春期定例一山会議
二十六日　平泉町上下水道事業運営協議会（管財　於役場）
二十七日　貫首　講話（岩槻仏教会主催『第三十九回仏教講演会』於本丸公民館視聴覚ホール）
二十八日　平泉町文化観光審議会（執事長　於役場）
三十日　儀礼文化学会主催「倉林正次名誉理事長を偲ぶ会」（澄元　於明治記念館）

◇四月

一　日　月次大般若（本堂）
　　千田孝信元貫首十七回忌追善法要（光勝院）
五　日　天台陸奥教区仏教青年会総会（執事長　於毛越寺）
六　日　中尊寺檀徒総代・世話人会総会（執事長、法務ほか　於武蔵坊）
七　日　気仙沼本吉冠者「高衡会」総会（執事長　於気仙沼プラザ）
八　日　仏生会（本堂）
　　福聚教会中尊寺支部定例総会（執事長　光勝院）
　　お経を読む会（大長寿院）
九　日　春の藤原まつり交通警備会議（管財　於役場）
十五日　平泉観光協会理事会（執事長）
十七日　群馬教区東漸寺様団参
　　平泉総社神輿会総会（執事長於役場）
　　平泉をきれいにする会総会（管財　於役場）
十八日　前中尊寺貫首勇猛光院望擬講大僧正俊和大和尚告別追善法要（本堂）
十九日　貫首　法話（陸奥教区寺庭婦人会　光勝院）
　　天台宗陸奥教区寺庭婦人会定例総会（執事長　於光勝院）
二十日　深大寺第八十九世住職張堂興昭師晋山式（貫首　於深大寺）
二十一日　中国仏教協会様団参
二十二日　世界遺産登録十五周年記念事業実行委員会総会（執事長於役場）
　　平泉観光推進実行委員会総会（執事長ほか　於役場）
二十五日　第四十五回**西行祭短歌大会**（講師穂村弘氏「言葉の不思議」）
三十日　山田雪棟梁・観光ガイド組合謝恩会（光勝院）

◇五月

一　日　**春の藤原まつり**開幕
　　藤原四代公追善法要（本堂）
　　稚児行列
　　郷土芸能奉演（江刺　行山流角懸鹿躍）

二　日　開山護摩供（開山堂）
郷土芸能奉演（栗原　栗原神楽）
春の藤原まつり「源義経公東下り行列」歓迎レセプション（貫首・執事長　於武蔵坊）
三　日　源義経公東下り行列（義経公役　歌手　尾崎匠海）
郷土芸能奉演（衣川　川西念佛剣舞）
四　日　古実式三番
半能「竹生島」
友和会神輿渡御
五　日　古実式三番「開口」
半能「田村」
郷土芸能奉演（平泉　達谷窟毘沙門神楽）
六　日　山王講（山王堂）
八　日　ウェーサカ仏教会総会（法務宥司　於一関松竹）
九　日　寛永寺浦井正明御門主本葬儀（貫首・随行圓了　於寛永寺輪王殿）
十一日　泉大津市生福寺様団参
十二日　群馬教区禅養寺様団参
十八日　富岡八幡宮神饌田御田植祭（総務五大　於花立神饌田）
お経を読む会（瑠璃光ノ靖純）
二十日　江之浦測候所訪問（貫首・管財澄円ほか）
二十六日　金銅華鬘委員会研究報告会
二十七日　中尊寺菊まつり協賛会総会（執事長・管財　光勝院）
二十八日　平泉商工会通常総会（執事長　於エピカ）

◇六月
一　日　月次大般若（本堂）
二　日　平泉芭蕉祭全国俳句大会実行委員会総会（執事長　於役場）
四　日　**伝教会**（御影供　本堂）
八　日　**法華経頓写経会**（光勝院）
十　日　ウェーサカ祭典（法務宥司・総代　於花泉町宝泉寺）
第二百五十九世天台座主藤光賢大僧正傳燈相承式（貫首・随行圓了　於延暦寺）
十三日　天台宗ニューヨーク別院本堂落慶二十周年記念参拝（～十八、貫首・随行祐輔）
十四日　令和七年度ふるさと平泉会総会（円教院　於東天紅上野店）
十六日　一関警察官友の会総会（執事長　於ホテル松の薫一関）
二十日　自在房蓮光忌法要（本堂）
社会を明るくする運動平泉町推進委員会（執事長　於エピカ）
二十七日　平泉世界遺産平和の祈り（於毛越寺）
二十九日　第六十四回**平泉芭蕉祭全国俳句大会**（光勝院）
講師・特別選者　白濱一羊氏

◇七月
一　日　月次大般若（本堂）
三　日　平泉町世界遺産推進協議会

総会（執事長　於エピカ）
四　日　世界遺産平泉・一関ＤＭＯ事業報告会（総務五大　於ホテル松の薫一関）
九　日　経蔵彩色委員会
十一日　**大長寿院前住職菅原光中師遷化**

十三日　お経を読む会（法泉院）
十五日　富貴寺様団参
大文字送り火警備会議（管財　於役場）
十六日　臨時一山会議
十七日　**清衡公御月忌**（胎曼供　本堂）
十九日　貫首　講話（「青空説法」　於和賀多聞院伊澤家）
富岡八幡宮神輿総代連合会歓迎交流会（円乗院　於武蔵坊）
二十日　平泉総社神輿渡御
二十四日　平泉信友会総会（総務五大代理出席　於武蔵坊）
二十六日　平泉水かけ神輿神酒開き（円乗院　於泉橋庵）
二十七日　桜友会清掃奉仕（開山堂周辺）

◇八月
一　日　月次大般若（本堂）
二　日　平泉商工会青年部ビアパーティー（執事長　於観自在王院跡）
四　日　比叡山宗教サミット三十八周年『世界平和の祈りの集い』（貫首　於延暦寺会館）
午後三時半　**〈平和の鐘〉打鐘**
七　日　夏堂籠り（～十一日、結衆、開山堂）
十四日　第四十六回中尊寺薪能
仕舞「鳥追船」
狂言「六地蔵」
能　「天鼓」
十六日　第六十一回**平泉大文字送り火**
十九日　奉納演奏（オオフジツボ　本堂）
二十一日　戸津説法聴聞（小堀光實師）（貫首・随行亮王　於大津市東南寺）
二十三日　施餓鬼会御逮夜（本堂）
二十四日　**大施餓鬼会・放生会**（本堂）
二十五日　讃衡蔵運営委員会
二十八日　奉納演奏（玉川学園オーケストラ部　本堂）
三十一日　蜂神社例大祭（総務五大　於紫波町蜂神社）

◇九月
一　日　月次大般若（本堂）
三　日　**泰衡公御月忌**（金曼供　本堂）
五　日　一隅を照らす運動陸奥教区本部　岩手大会（於前沢ふれあいセンター）
十二日　神奈川教区オンライン研修会（講師　邦世師）
十三日　五郎沼薬師神社例大祭（総務五大　於紫波町同神社）

十五日　第六十八回平泉敬老会（執事長　於平泉中学校体育館）
十六日　輪王寺門跡第八十七世　柴田立史御門主晋山披露宴（貫首・執事長　於ホテル東日本宇都宮）
十七日　白符忌（本堂）
本坊表門修理方針説明会（光勝院）
二十日　赤堂稲荷例祭（護摩供）
二十一日　富岡八幡宮様神饌田抜穂祭（総務五大　於花立神饌田）
二十三日　秋彼岸会法要（常行三昧　本堂）
お経を読む会（利生院）
二十六日　平泉観光協会理事会（執事長）
二十八日　埼玉教区長福寺様団参

◇十月

一　日　月次大般若（本堂）
二　日　慈眼会（本堂）
三　日　天台宗陸奥教区仏教青年会五十周年記念事業（光勝院）
五　日　中尊寺通りホコ天まつり開会式（参拝晋照　於中尊寺通り）
天台宗神奈川教区様団参
七　日　平泉文化財調査委員会
八　日　第三十一回平泉町社会福祉大会（執事長　於エピカ）
中尊寺菊まつり協賛会役員会（光勝院）
十　日　寛永寺創建四百周年記念慶讃法要（貫首・執事長・随行圓了　於寛永寺）
十六日　金色堂調査
十九日　お経を読む会（地蔵ノ秀厚）
二十日　菊まつり開闢法要
二十一日　中尊寺檀信徒総代・世話人研修旅行（～二十三日、比叡山延暦寺・伊勢神宮）
讃衡蔵運営委員会
二十三日　令和七年度天台会（貫首　二之問当役出仕　於比叡山延暦寺）
二十五日　紅葉銀河（参道照明　～十一月九日）
天台宗陸奥教区第二部檀信徒会ミニ一隅会（法務秀法・檀信徒　於毛越寺）
天台聲明七聲会「如意輪講式」鑑賞（貫首・執事長ほか　於江東公会堂）
二十七日　中国天台県一行団参
二十八日　**秀衡公御月忌**（金曼供　本堂）
二十九日　桜友会清掃奉仕（北坂周辺）

◇十一月

一　日　**秋の藤原まつり開幕**
藤原四代公追善法要
稚児行列
三陸郷土芸能奉演（大槌町臼澤鹿子踊）
郷土芸能奉演（一関　行山流舞川鹿子躍）
奉納演奏（弦楽四重奏Mカルテット　旧覆堂）
二　日　郷土芸能奉演（胆沢　朴ノ木澤念仏剣舞）

お経を読む会（積善ノ祐輔）
三陸郷土芸能奉演（大槌町城山虎舞）
三　日　能「枕慈童」
謡・仕舞（二葉きらり園、一関喜桜会　能舞台）
郷土芸能奉演（衣川　川西念佛剣舞／胆沢　行山流都鳥鹿踊）
五　日　浄土宗福岡教区詠唱教司会様団参
六　日　福聚教会中尊寺支部最優秀賞受賞報告会（執事長ほか　光勝院）
八　日　秋期企画「経蔵法楽～声明の夕べ」（経蔵）
九　日　平泉学シンポジウムIN東京（総務五大　於一橋大学）
三陸郷土芸能奉演（山田町八幡太神楽）
十　日　写経奉納式（光勝院）
十二日　声明研修（～十三日、光勝院）
十五日　菊まつり表彰式（光勝院）
十六日　猊鼻渓名勝指定一〇〇周年記念式典（執事長　於東山地域交流センター）
北上川リバーカルチャーアソシエーション記録誌完成報告会（執事長　於ホテル松の薫一関）
二十三日　天台会御逮夜（本堂）
二十四日　**天台会**（御影供　本堂）
秋期一山会議
二十六日　中尊寺参詣曼荼羅閲覧（～二十八日、東北大学大学院文学研究科教授　堀裕氏他）

協力

画像提供　株式会社 集英社

画像提供　株式会社 文藝春秋

写真提供　川西大念佛剣舞保存会

ご協力、ありがとうございました。

寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。
ぜひご利用ください（https://www.chusonji.or.jp/）。

中尊寺〈寺報〉『関山』第三十一号

令和八年（二〇二六）二月十日

発行　中尊寺
（執事長　菅原光聴）

〒〇二九―四一九五
岩手県平泉町字衣関二〇二

編集　中尊寺仏教文化研究所

印刷　川嶋印刷㈱

〈発行　中尊寺〉